

第64回 古代史を語る会

日本人の起源

(前半:旧石器人・縄文人+宝貝)

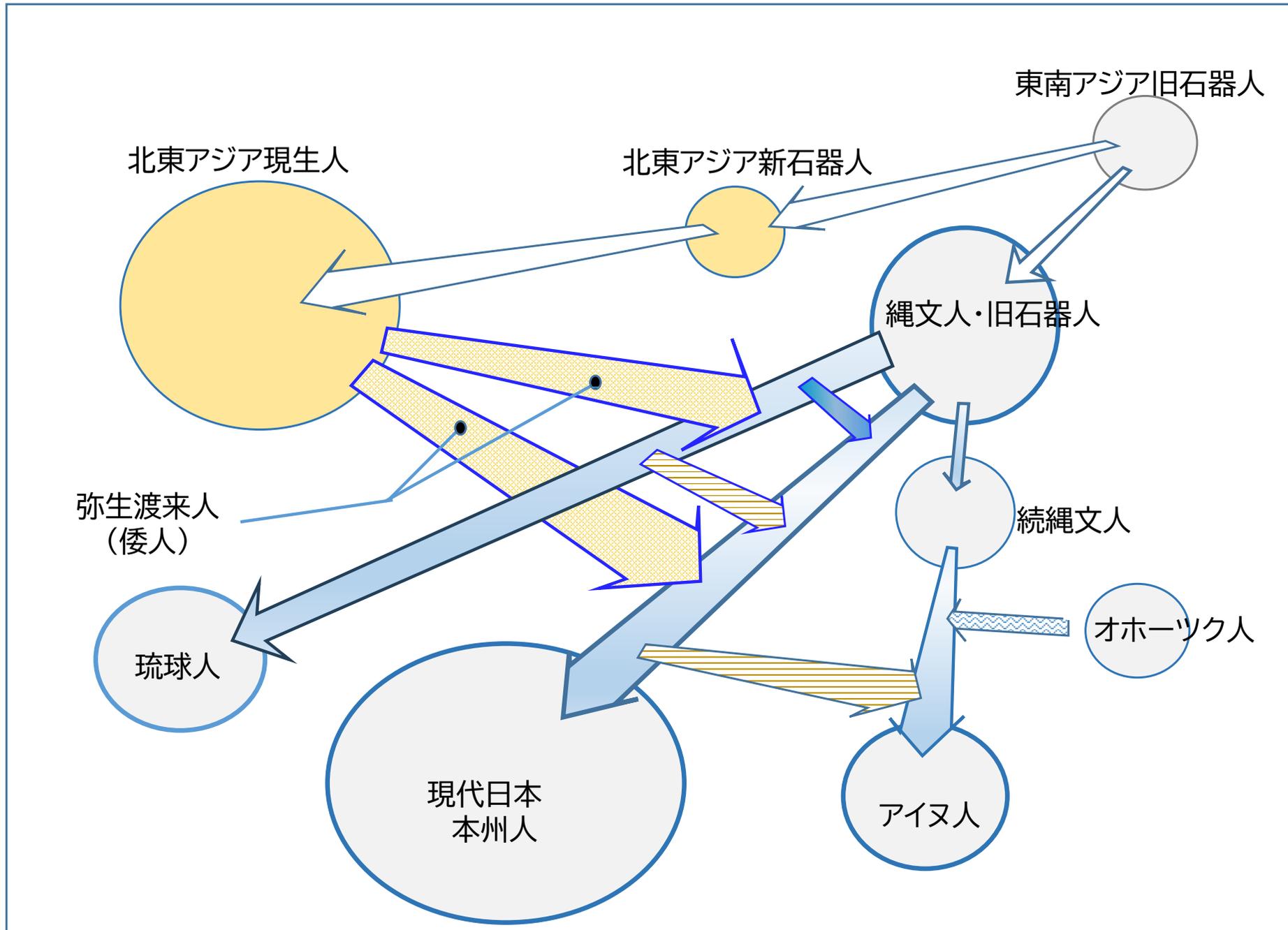
2026年1月23日(金)

丸地三郎

日本人の起源論

「埴原和郎論文の図」修正案

2025/6/27 丸地案



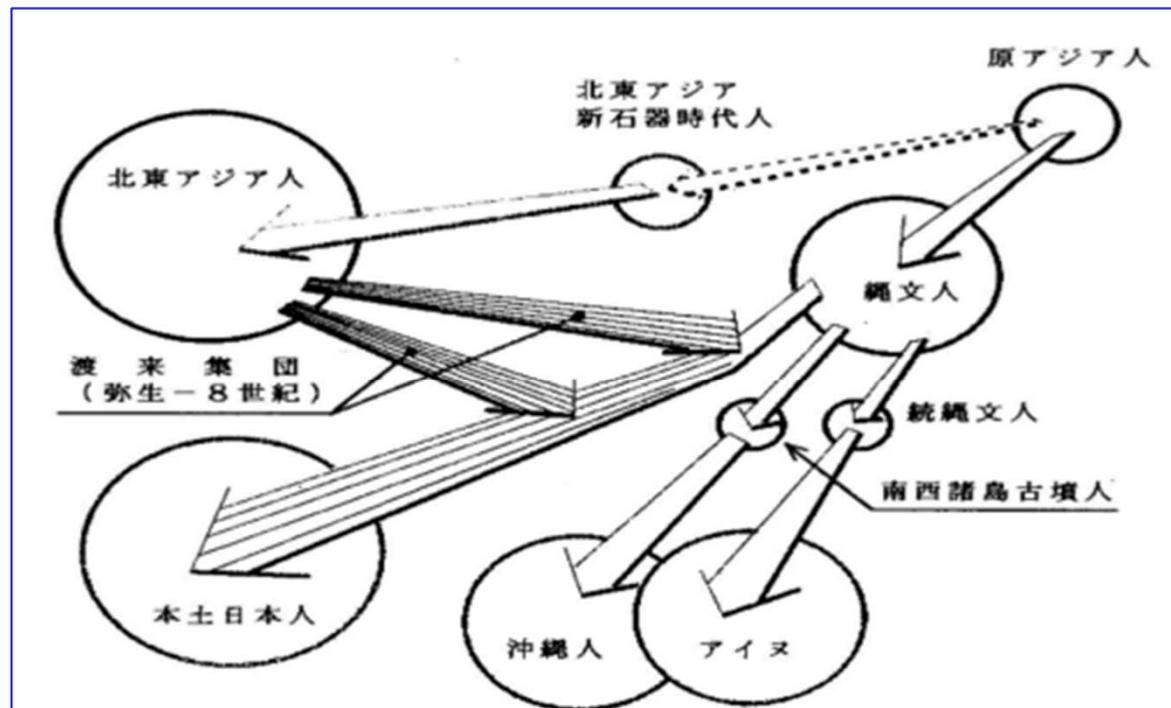
日本人起源説の歴史的変遷

1. 1940年代以前:日本人の渡来起源説が定番。
2. 1940年代後半、長谷部言人などは、「混血は無く、日本人は石器時代から現代にいたるまで遺伝的に連続した集団である」と主張。
(水田農耕に依存する弥生式時代およびその後も、日本人の体質を一変させるほどの混血はおこらず。)
3. 1950年代から60年代にかけて鈴木尚は、「長谷部言人らの流れをくむ「変形説」を主張した」。この流れは、1970年代まで(日本人起源論の)支配的パラダイムとなる。
4. 1950年代から1970年代には、金関丈夫の渡來說を展開し混血渡來說を多く支持。
 - 日本人は異種混交の「民族」、山口県土井ヶ浜遺跡(1950~)の発掘、渡來說を主張。
5. 1980年代から90年代にかけて、遺伝学的研究が加わる
 - 埴原和郎の1991年「二重構造モデル」発表。
 - 遺伝的形質の類似性と多様性がわかる。

上記は、文化人類学者:池田光穂氏のホームページから引用

渡来元は、不明のまま議論されてきた。

これ以降は遺伝学をベースに研究が進む。
現在も、やや混沌とした状況が続く。



• 古代日本の地理的特殊性

1. 海に囲まれた国であること。
 - 舟・船での渡来が必須条件
2. 大陸側とは、黒潮で隔てられていた。(黒潮は、世界最大の海流)
 - 舟・船に乗りなれた人でも、黒潮を越えることは、脅威。
 - 古代人の地球観では、巨大な海流の流れる先は、世界の果て。恐怖の地域。
 - 中国人は、古代には、黒潮を越えることは出来なかった。
 - 三国志の時代の呉ですら不可だった。
 - 黒潮を越えることができたのは、倭人だけ。(呉志・後漢書に記録有り。)
 - 黒潮を越えることが可能な民族は、黒潮の近くを舟で回遊していた民族。
 - 帆を装備した舟を所有していた民族
3. 海面上下に由来する大陸との徒歩往来の可否
 - 氷河期には海面が低下して、人が徒歩で渡れることで、大陸間の移動の可能性を検討。
 - 新人(ホモサピエンス)が移動した時期は5-6万年以降、その期間中に絞ると
 - 2万年前の極寒期に、海面低下が100mを越えた。
 - この時期でも、朝鮮半島と九州の間は陸続きにはならなかった。
 - 本州と北海道の間も海で隔てられた。
 - 北海道とサハリン・シベリアは陸続きになった。

• 海洋民族と非海洋民族

- 大多数の人が、泳げるか？・泳げないか
- 民族移動で舟・船に乗り移動する場合には、泳げる必要がある。
 - 物理的には、乗船するには、泳げることは不必要だが、民族移動を考慮する時は不可欠な条件。

(参考:2014年韓国 セウォル号事件 304名死亡)

現在の日本では日本語(倭人の言葉)が使われている。

弥生渡来民(倭人)が日本に来た後に、縄文人と混血し、言語は日本語に置き換わったと推定される。

母国語が変わったことになる。(縄文人の言葉は失われた。)

- ・ 琉球・沖縄 → 琉球語(日本語と同一起源)
- ・ 本土 → 日本語
- ・ アイヌ → アイヌ語(残存縄文語とも云われる)

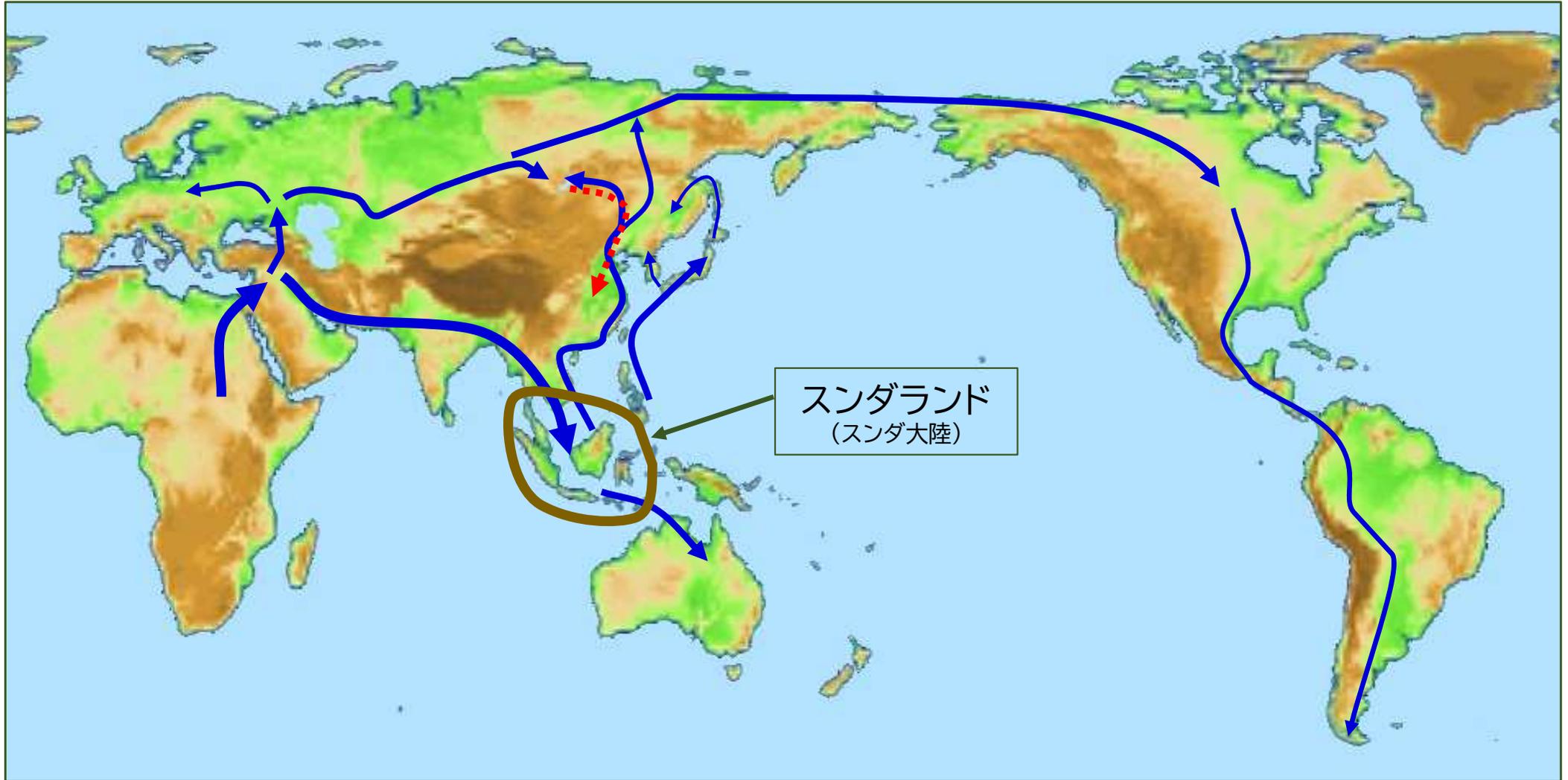
その変化の時にも縄文人が絶滅した訳ではない。

縄文人の血はその後、現在までも存続している。

地域差が有るが、Y遺伝子では20%から60%存続する。

- ・ 一つの国で、ある時期から、母国語が、別の母国語に置き換わる条件
 - ・ 言語学に答えを探したが、答が有るようには見えない。
 - ・ 一つの国の母国語は、通常は変わらない。
 - ・ ある国に、少数の他民族が入ってきた場合は、
 - ・ 他民族は排除される。又は、
 - ・ 吸収され、混血し、少数民族の言語は消滅し、母国語は変わらない。
 - ・ ある国に、別民族が攻め入り、住民を支配下に置いた場合。
 - ・ 言語は二分化し、支配民族の言語と被支配民族の言語が併存する。
 - ・ この状態が、長く続いた場合には、支配民族の言語に母国語が置き換わる。
 - ・ 世界史上の実例が存在する。
- ・ 日本の先住民である縄文人は、
 - ・ 磨製石器を世界に先駆け、3万5千年前から活用してきた優れた民族(日本以外では、1万年前に開始)
 - ・ 条件の厳しい黒潮の流域の海洋民族
 - ・ 沖縄、九州・本州から、北海道→樺太→シベリアへ、九州から朝鮮半島へ進出していた民族。
 - ・ 言葉を失ったが、決して、無能な野蛮人では無かった。

日本人を主にした出アフリカ拡散ルート

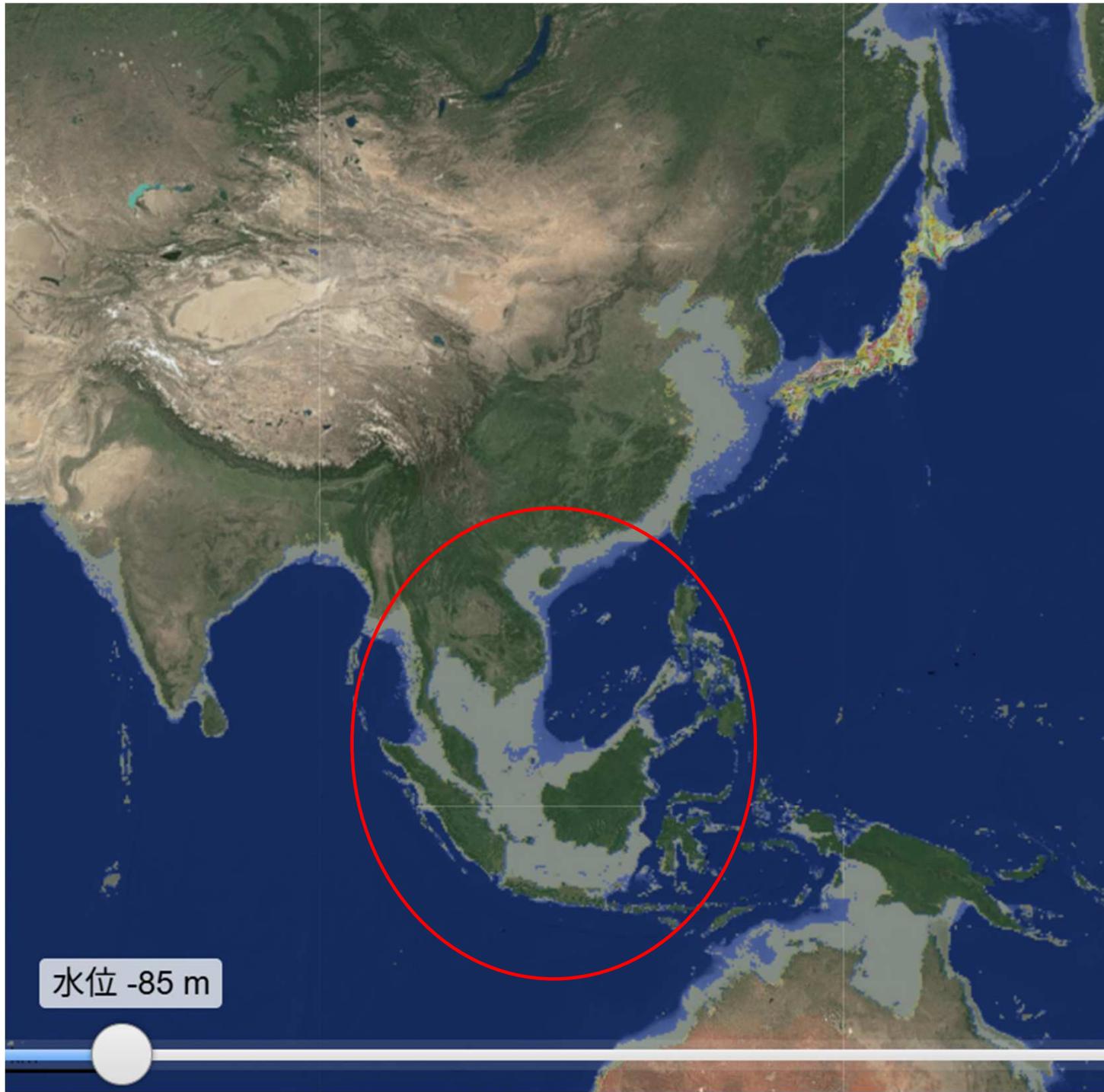


- 出アフリカ→スンダランド : 7万~6万年前
- スンダランド→オーストラリア : 5万年前
- スンダランド→フィリピン→沖縄・日本列島 : 4万年前
- スンダランド→中国大陸→バイカル湖周辺 : 4万年前
- バイカル湖周辺→中国大陸 : 2万年前以降
- 日本→北海道→シベリア : 3万5千年前

- 出アフリカ→コーカサス山脈越え : 5~4万年前
- コーカサス→ステップ地帯・バイカル湖:4.5万年前
- コーカサス山脈→ヨーロッパ : 3万年前
- シベリア→アラスカ→アメリカ大陸 : 1.4万年前

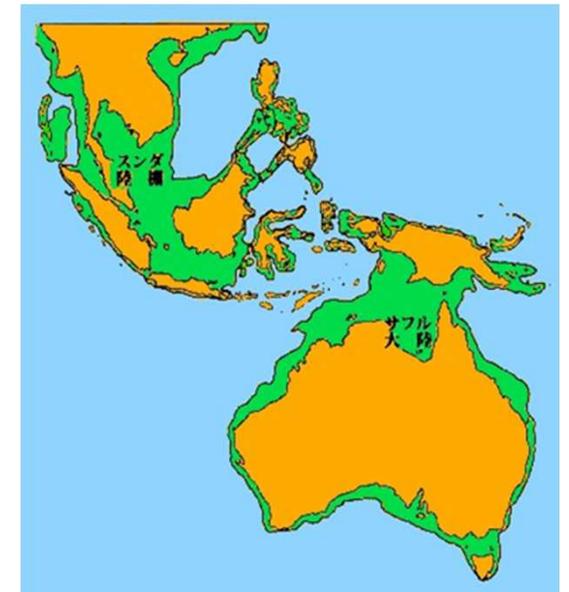
2025/01/10 丸地

スンダランド(大陸)とは？



水位 -85 m

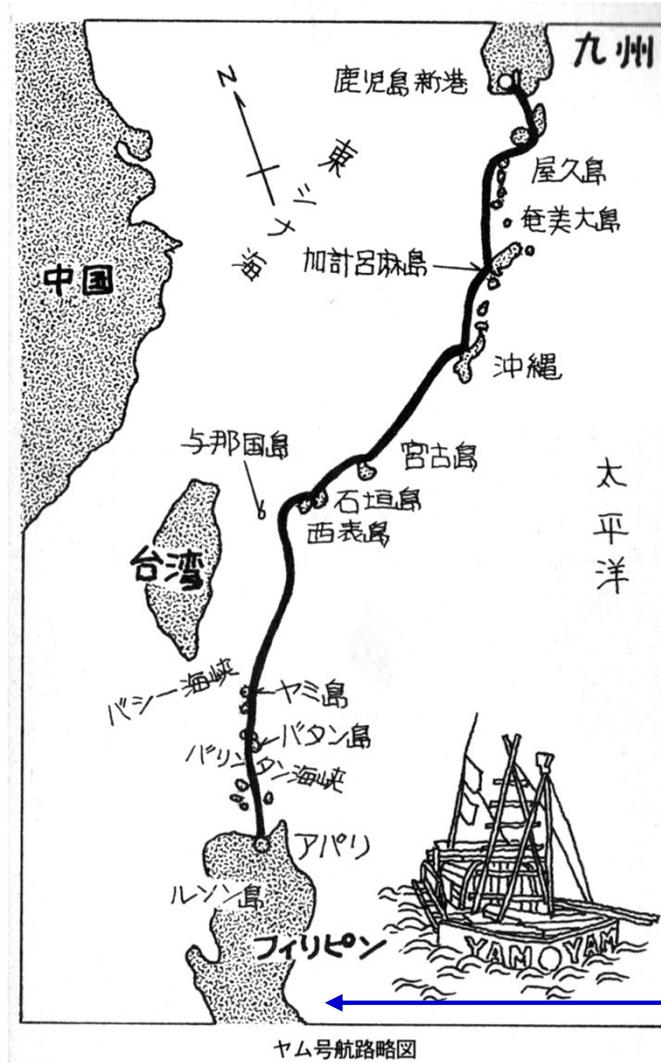
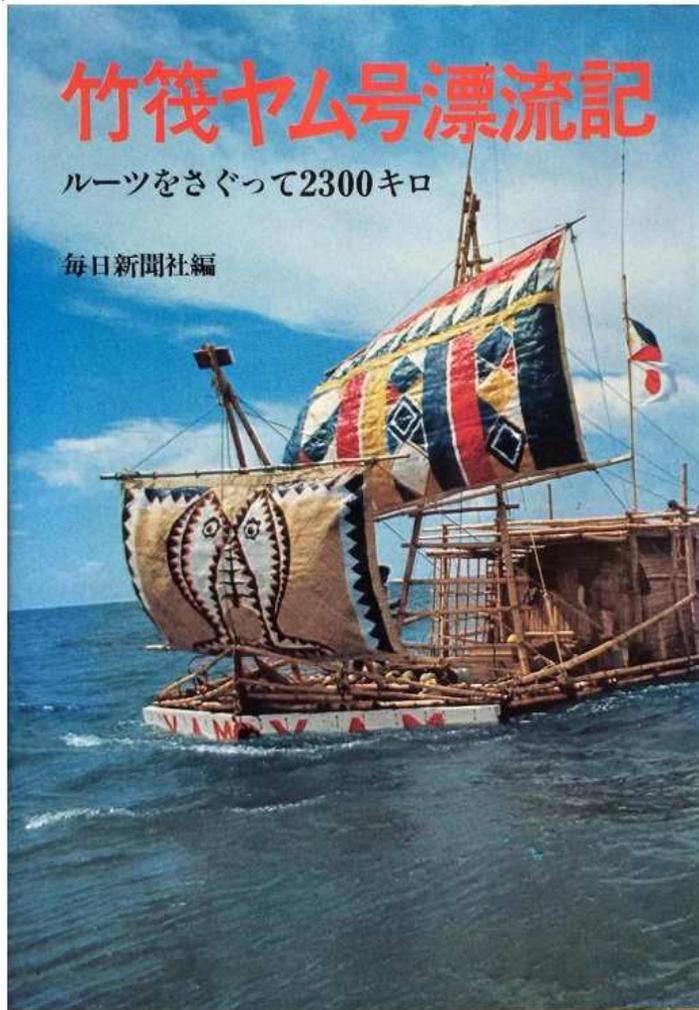
- 氷河期には海面が下がり、80 m～90m下にあった。
- 赤丸の領域: スンダ大陸では、陸地が広がっていた。
- 6万年前～5万年前には、アフリカで発生した「新人」が次々と、スンダ大陸に到来し、新人類の「ゆりかご」と呼ばれる。
- 東側には、ニューギニアやオーストラリアがある。5万年前頃には、「新人」が海を渡り、移住に成功していた。
- フィリピン諸島は、陸地化していたが、狭い海でスンダ大陸とは隔たっていた。



スンダランドから日本へのルート

- 日本人(旧石器人)の渡来ルートはスンダランドからの到来と推定される。
 - スンダランドに隣接したフィリピンに居住した民族が、凡そ**4万年前**に、帆付の丸木舟で、黒潮に乗り、直接沖縄・日本本土へ到着したルートと考える。根拠は以下に示す。
- 1. **スンダランドから5万年前にオーストラリアとパプアニューギニアへ移住した人々は、海面低下を考慮しても、80 km以上の海を渡り、移住している。文化人類学者/考古学者は、この移住の方法の最も有力な方法は、帆の付いた筏又は小舟と推定している。(帆と船の形状は学術的に検討されているが、結論は出ていない。)**
- 2. 台湾からの移住は、海部氏の実験では、2回の失敗があり、最終的に丸木舟を手漕ぎで渡来に成功したが、現実的な民族移動の方法としては、不適切なものと考えられ、参考とはし難い。
- 3. フィリピンから沖縄・日本本土への実験航海や戦時中・直後の避難航海の成功例があり、現実的な民族移動の方法と推定できる。
 1. 1977年 竹筏ヤム号にてフィリピン・ルソン島出発→鹿児島港 2300km
(双葉文庫 ヤム号漂流記 倉島 康著 / 毎日新聞社 竹筏ヤム号漂流記-ルーツをさぐって2300キロ)
 2. 1977年 木造双胴帆船でフィリピン・ルソン島出発→鹿児島港 2500km
(角川文庫 翔べ怪鳥モア―野性号IIの冒険・)
 3. 1946年6月 9名の日本兵 1隻のカヌー(アウトリガー付き)に乗りフィリピン・ポリリオ島(ポリリヨ島)→屋久島 2600km 30日間
(波頭二千六百キロ 日本兵の漂流--ポリリオ島 「アジア海道紀行」の一部 足立倫行著)
- 黒潮に乗り、30日～44日で日本本土へ到着しており、フィリピン付近で、海洋航海の経験を積んだ海洋民ならば、沖縄・日本本土への航海は可能であったと推定する。
- 日本の先住民の遺跡からは、磨製石斧が出土し、木材を伐採し、丸木舟加工が可能であったと推測される。
- 沖縄の古来の丸木舟のサバニは、海洋用で、扱い易い帆が付く。この原型が使われたと推測。

竹筏ヤム号・9名の日本兵の舟 及び 航路



日本兵の乗った船は上記より大型で帆付

<http://cb1100f.b10.coreserver.jp/omake4.html> より借用

9名の日本兵が出発したポリリオ島は、この付近の島

沖縄のサバニ丸木舟

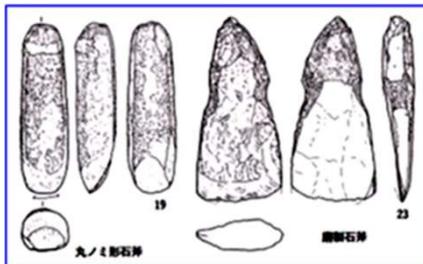
- 沖縄から九州・本土への移動の手段は、下記のサバニ丸木舟又はその祖先系丸木舟。

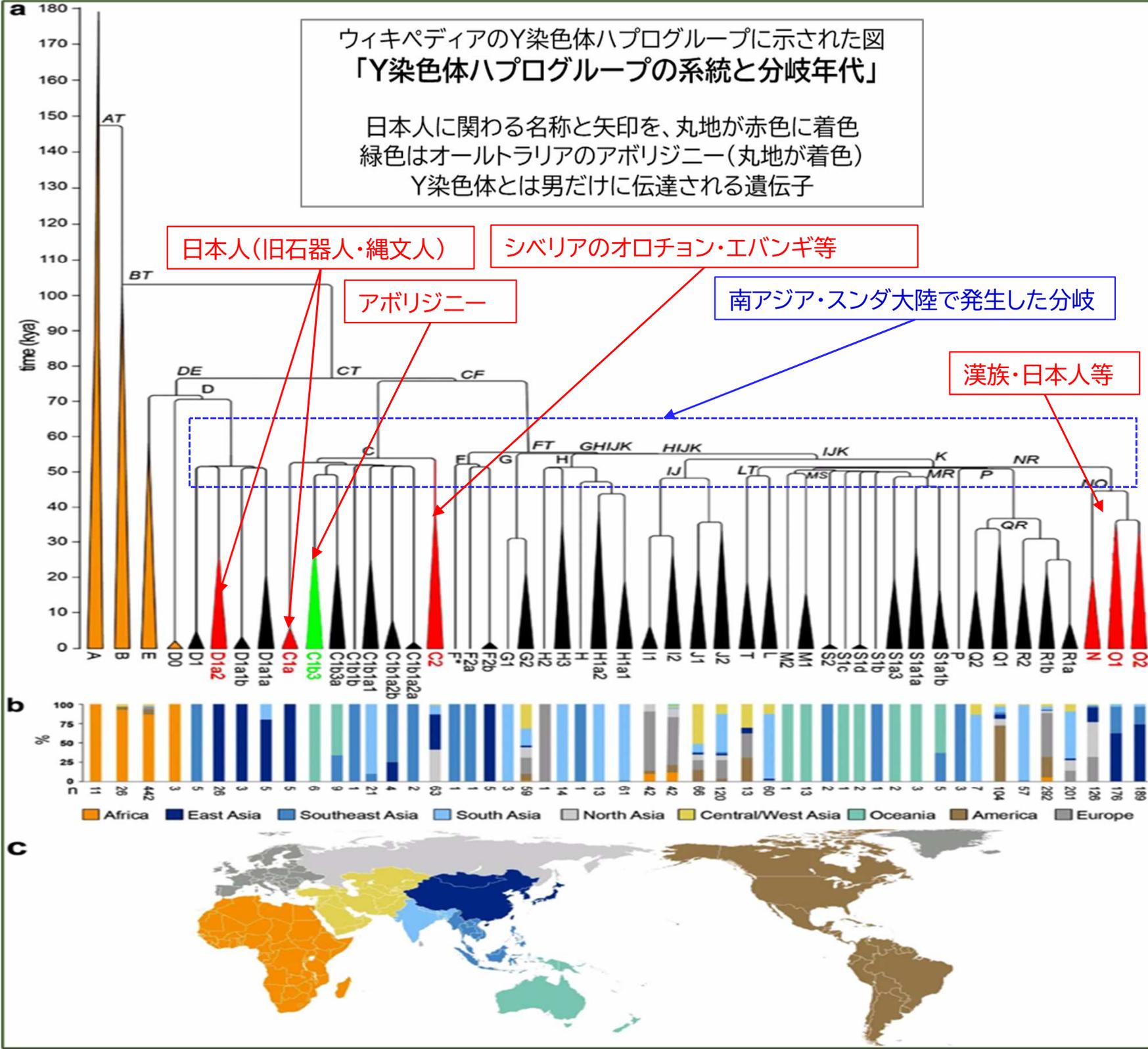


慶良間の博物館にある丸木舟のサバニ
<http://takezoumaru.blog.fc2.com/blog-entry-260.html>
 湯河原・真鶴／野生生物探検隊 より



- 鹿児島島の杵ノ原遺跡には、丸木舟製作用の丸ノミ型石斧が出土
 (1万4千年前)

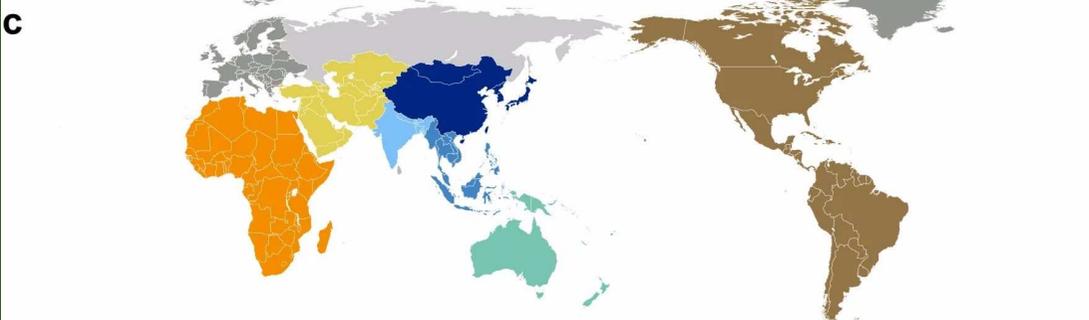
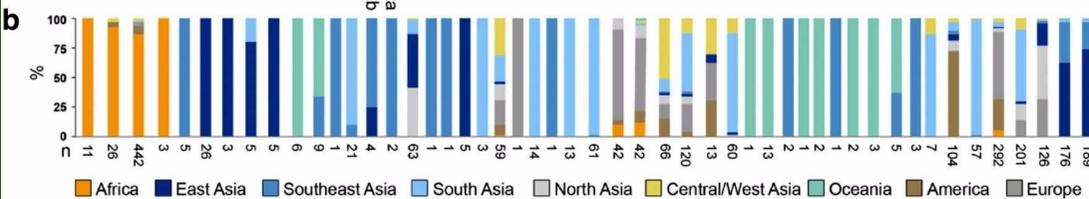
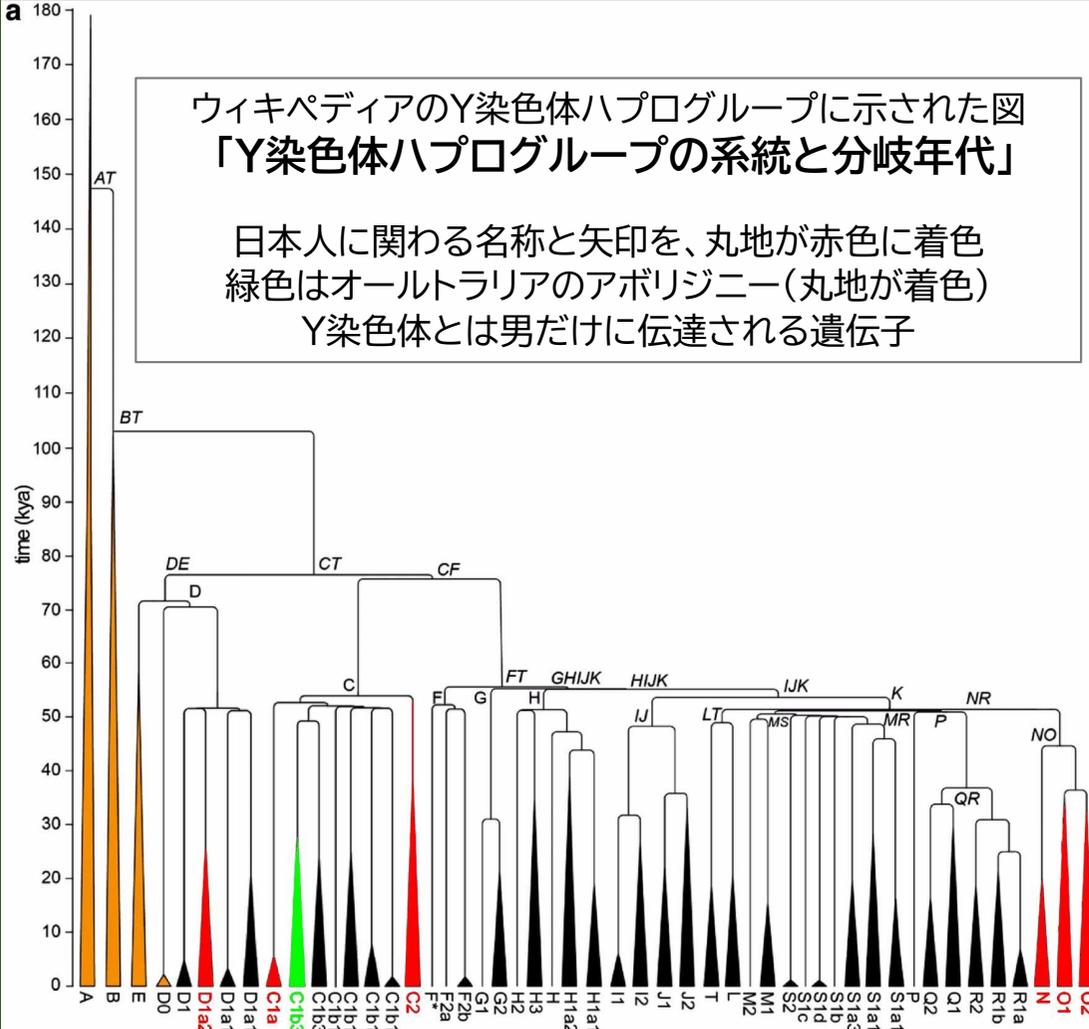




スンダランドから日本へのルート

ウィキペディアのY染色体ハプログループに示された図 「Y染色体ハプログループの系統と分岐年代」

日本人に関わる名称と矢印を、丸地が赤色に着色
 緑色はオーストラリアのアボリジニー(丸地が着色)
 Y染色体とは男だけに伝達される遺伝子



- この図上では、Y-DNAは：
 - 日本の縄文人のD1a2とC1a。
 - D1a2は、旧D2で、D-M55とも表記される
 - C1aは、旧C1でC1aとも表記される)
 - オーストラリアのアボリジニーは、C1b3。
 - DとCは、最初に分岐し、スンダランドに最初に到着したグループと考えられる。
- C1b3は、「舟又は筏」と「帆」を使いオーストラリアに5万年前頃に移住したと、文化人類学者などは推定。
- 縄文人のD1a2とC1aも、4万年前に「舟」と「帆」を使い、スンダランドから移動したとしても、おかしくない。
- C2(C-M8)は、シベリアの東北部に居住したオロチョン族・エベンキ族などで、旧石器時代にシベリアで縄文人と混血した可能性があり、その後、5～6世紀にオホーツク人が北海道へ到来し、アイヌ人と混血した。この歴史年代の混血の結果が、現代人のDNAに影響していると見られる。
- 弥生渡来人のY-DNAであるO系統は、分岐された時期は比較的新しく、スンダランドへ到来した人種としては、最後のグループと推定される。
 - 残存した人々はスンダランドの新しい主役に。
 - 一部は、凡そ4万年前に、陸上を徒歩で北上し、中国大陸の主役になった。
- 北上の原因をもたらした原因は熱帯マラリアと推定。

➤ Y染色体DNA

- 世界中で、ほぼ日本人だけに見られる型のDNAが3系統ある
 - D2: **アイヌ人の85%**、日本人全体の38%
 - C1: 沖縄人の4% 日本人全体の2%
 - O2b1: アイヌ人の0%、**日本人全体の21%**
(ほぼ日本人だけ、ベトナムなどで少数)
(O2b1は以前はY2型と呼ばれていた)
- 日本人の30%(上記の数値とは相違)と韓国人の10%に見つかるY2といわれる型はその他の地域では発見できないが台湾で65人中8人で見つかった。その8人の内3人は名前を「陳」という。(中堀豊著、Y染色体からみた日本人から)

➤ Wikipediaの日本人の中の「日本人および周辺の諸民族のY染色体ハプログループの割合」(2026/1/21)

旧名称	試料数	n	C-M130		D-CTS3946			NO-M214	N-M231	O-Z231 93	O-M95	O-M175				Q-M24 2	R-M207
			C-M8	C-M217	D-M174 (xD-F6251 ,D-M64.1)	D-F6251	D-M64.1					O-M268			O-M122		
												O-47z	O-M176				
													O-F2868 (xO-47z)[注 7]				
日本 (Nonaka et al. 2007)[97]	日本	263	2.3	3		0.4	38.8		0.8	3.4	0.8	25.1	8.4	16.7	0.4		
日本(Hammer et al. 2006)	アイヌ	4	0	25	0	0	75	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	沖縄	45	4.4	0	0	0	55.6	0	0	0	0	11.1	11.1	15.6	0	2.2	
	本州	214	5.6	3.3	0.0	0.0	29.0	2.8	1.8	0.0	2.3	24.3	7.0	21.0	0.5	0.0	
	計	263	5.3	3.0	0.0	0.0	34.2	2.3	1.5	0.0	1.9	21.7	7.6	19.8	0.4	0.4	
日本(Sato et al. 2014)	計	2390	4.7	6.1		0.1	32.1		1.3	1.2	1.3	22	9.9	19.7			

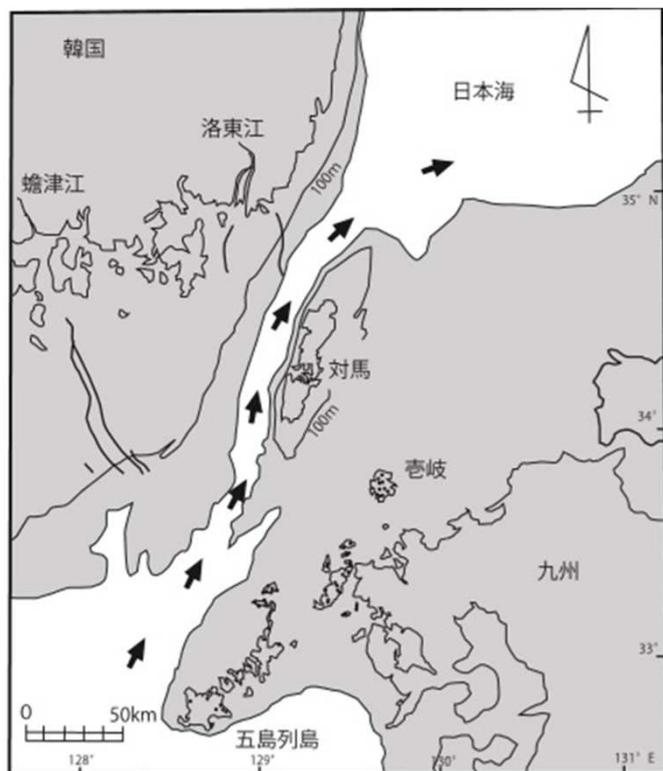
Y-DNAの表示方法
の変遷と現状

2011年1月20日改訂	旧名称	主な地域	系統名称	ハプログループ	
ver.11.1	C1	日本列島	C1a1	C-M8	
ver.11.0	C3	シベリヤ北部	C2	C-M217	
ver.10.0	D1	チベット	D1a	D-227276	
ver.10.0	D2	日本列島	D1b	D-M55	
ver.10.0	O1	中国南部	O1a	O-M119	
ver.10.0	O2a	東南アジア	O1b1a1a	O-M95	
ver.10.0	O2b	朝鮮半島	O1b2	O-M176	O-L682
ver.10.0	O2b1	日本列島	O-47z	O-M176	O1b2a1-47z
ver.10.0	O3	漢族北方	O2	O-M122	

2016年1月20日改訂のISOGGの系統樹(ver.11.20)による

旧石器時代の遺跡 分布/密度

氷河期最寒期の 対馬
海峡



第5図 LGM期の対馬海峡



旧石器時代の遺跡分布図
「図解・日本人の人類遺跡」
日本第四学会 小野昭/春
成 秀爾/小田静夫編
着色by丸地

日本人の到来時期が遡る可能性

- 冠(かんむり) 遺跡(広島県)で国内最古とみられる約4万2000年前の石器が出土した。
 - 放射性炭素(C14)年代測定法で調べたところ、最上層部は2万8200年前、最下層部は4万2300年前のものとなった。
 - 学界で広く認められていた最古級の遺跡は3万7000年前あたりのものだったことから、冠遺跡の石器が最も古く、人類が日本列島で生活を始めた時期も従来説から遡る可能性が浮上している。



白い紙より下が、約4万2300年前の地層



追加調査が行われた冠遺跡 (広島県廿日市市で)



旧石器時代・磨製石斧について

- 世界の先史時代の定説では、磨製の石斧の出現は「新石器時代」(1万年前以降)からで、日本のように旧石器時代(3万2,000年前)には確認されていない。
- 発見： 1972(昭和47)年4月東京都板橋区都立城北中央公園(栗原遺跡P地点)の整備に伴う、試掘調査が都文化課(小田静夫担当)によって行われた。
 - この調査で立川ローム第X層(3万2,000年前)から、刃部を研磨した立派な「磨製石斧」が1点発見された(小田・キーリ1989)。
- 特徴： 形態は楕円形が多く、新しい時期には短冊形、撥形が認められる。
 - 素材は扁平礫の表裏半割品と、大形自然礫から剥離された剥片がある。研磨は刃部を中心に行われ、磨製の部所は片面、両面、一部分など多様である。
 - 「刃部磨製石斧」「局部磨製石斧」などと呼ばれることもある。
- 分布： 日本の旧石器時代の磨製石斧は、東北地方から九州地方にまで約250ヵ所、900点以上の発見がある。諸外国では、
 - ヨーロッパに1点(2万5,000年前)、
 - ロシアに2点(2万~1万5,000年前)、
 - オーストラリアに十数点(2万9,000~2万年前)確認されている(小田2017)。
- こうした古期に多数の磨製石斧が存在する旧石器文化は、諸外国には認められないので、日本独自の発生と発達を考える必要がある。
- 用途： 骨角器の加工や木材の伐採、加工などに使用された。
 - 研磨状況や破損、使用痕などからは、それほど強度の使用に供した痕跡は看取されない。
 - つまり「斧」という使用よりも、切る、削るという「スクレイパー」的使用の可能性が大きい(小田2017)。
- 日本人の祖先は、世界に先立ち磨製石器と開発し、優秀な石器を多種・大量に作り使い込んだ、高い技術レベルと持った民族であった。この技術レベルが現代日本の基礎にあると云える。



日本以外の地域では、石器は発展していたのか？

磨製石斧 小田静夫のブロボより

- ・ 日本の旧石器文化の磨製石斧は、(中略)つまり現在「世界最古」の磨製石斧であり、さらにこの磨製技術は日本で独自に発明された可能性もある。(小田静夫)

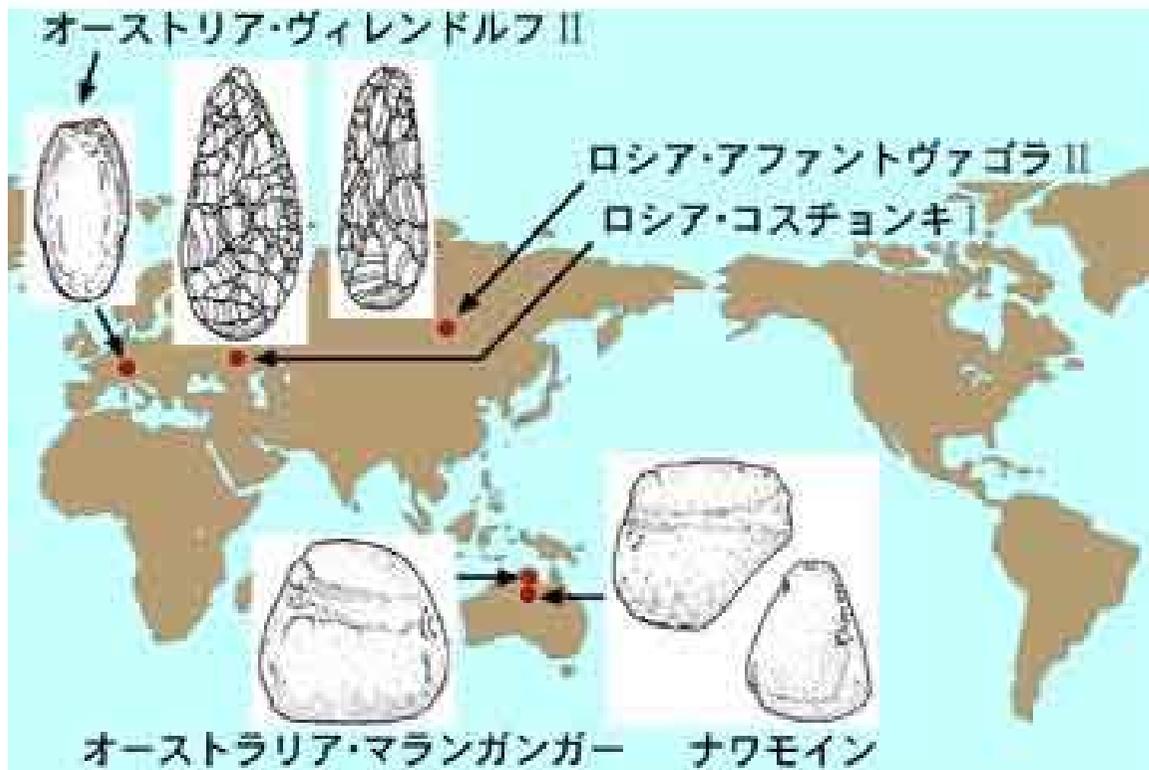
(日本出土は3万5千年前から)

「世界最先端の独自技術が日本にあった。」と云える。

- ・ 世界各地の磨製石斧は、日本以外では、更新世に溯る例は、殆ど知られていない。

(更新世=約258万年前から約1万年前までの期間)

- ・ 認定し得る僅かの資料も確証に欠く。
- ・ 例示されている6例中オーストラリアの2例以外は全て2万4千年前より新しい



世界最古の往復航海：「黒曜石海上シャトル」

- 神津島は、伊豆南端の石廊崎から南南東約50 kmの太平洋上に浮かぶ黒曜石原産地。
- 神津島産の黒曜石は良質で、中部・関東地方に広く供給され、槍先や矢じりなどの素材として、縄文人の狩猟活動を支えた。
- 最近になって約**3万8000年前**に利用されていたことが判ってきた。

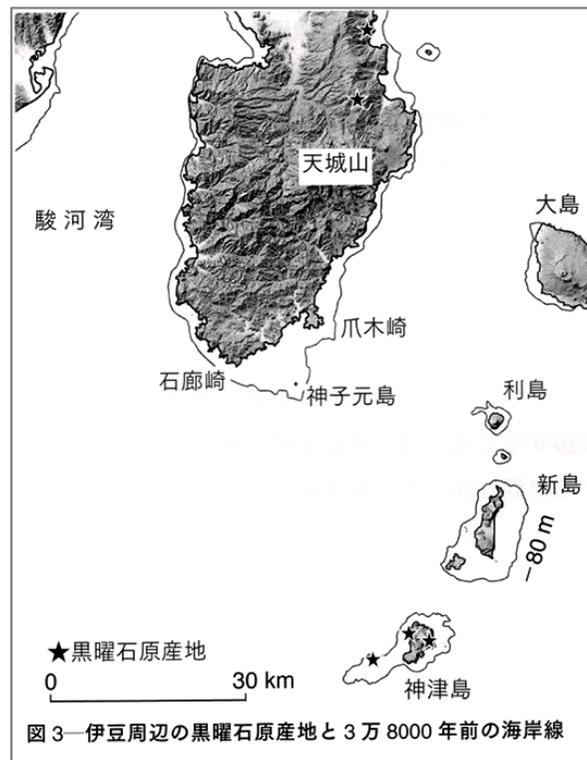
「黒曜石海上シャトル」

神津島と伊豆半島の間には、本流から分かれた黒潮分流が北上。その平均的な流速は時速約3km。伊豆半島—神津島間は約40km。

井出丸山遺跡の黒曜石の原産地は、25点中22点が神津島産と判明。

神津島産黒曜石の中部・関東地方への供給は3万8000年へ3万4000年前の約500年間にわたる。

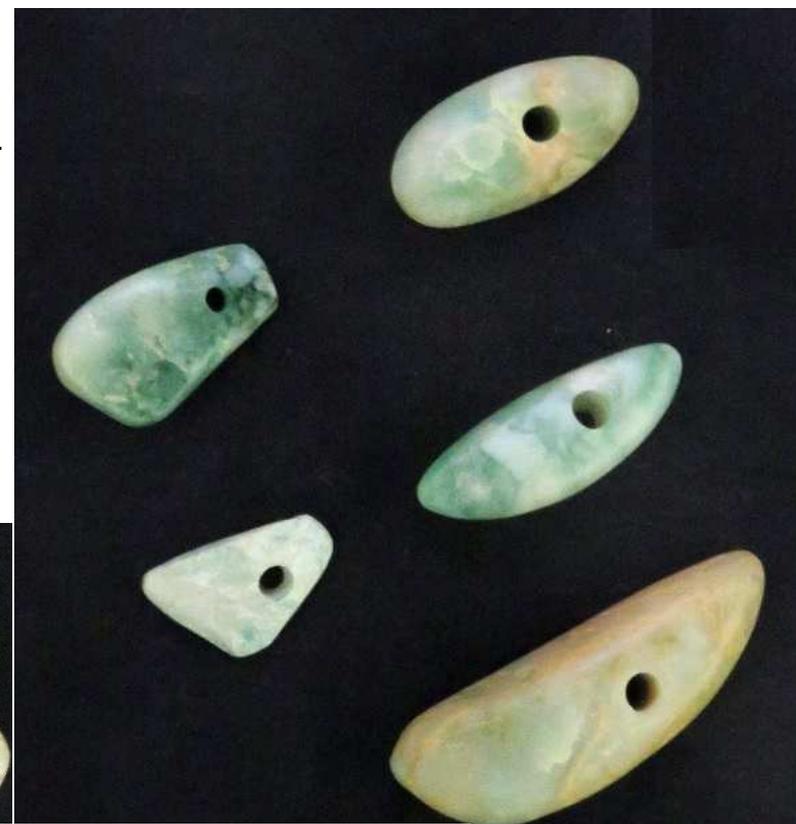
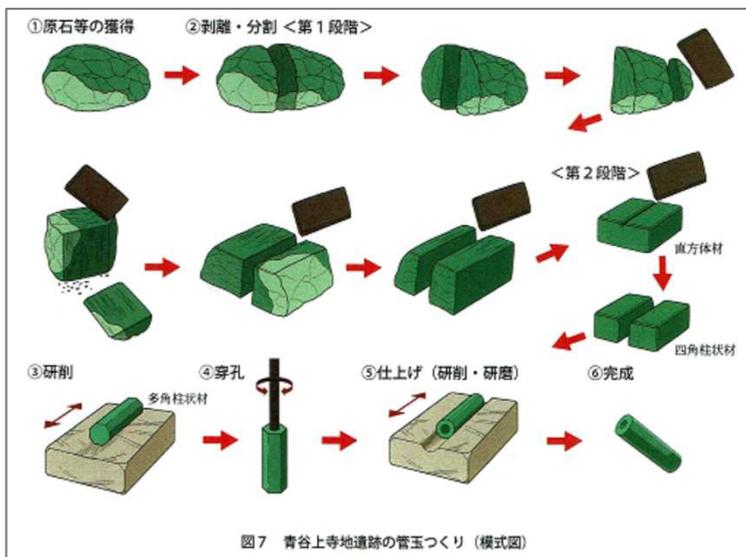
炭化物の炭素14年代(較正值)は、約3万8000年前に遡るものであった。



- 日本人の祖先は、約3万8千年前から世界最古の往復航海を継続的に行ってきた民族。
 - 氷河期の寒冷期に、黒潮の分流を越えて、遠洋航海を行ってきた海洋民と云える。
 - 世界最初の片道・遠洋航海は、スンダ大陸から、5万年前にオーストラリアとパプアニューギニアへ移住したアボリジニ人で、80km以上の海を渡り、移住している。

翡翠(ヒスイ)と勾玉の加工技術

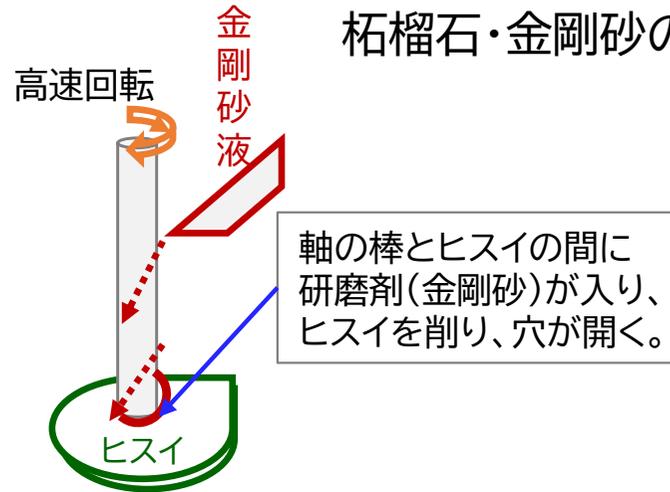
- ・ ヒスイ原石は、日本海岸の糸魚川市で産出。
 - ・ 約7000年前(縄文時代早期)から使用開始。
 - ・ 日本の複数の地域でも産出するが、装飾品としての価値のあるヒスイ原石は糸魚川産のみ。
 - ・ 古代中国でも硬玉と云われ珍重されたが、その産地も糸魚川。
- ・ 硬いヒスイに垂直に穴を明け加工する技術は、日本にしか存在しなかった素晴らしい技術。
- ・ ヒスイは、宝石の硬度を示すモース硬度で 6.5 - 7 と、極めて加工が難しい。
 - ・ 日本では、**縄文時代から**ヒスイに穴を開け、飾りものとして使われ、日本各地から出土する。
 - ・ 加工方法は、ボール盤のように、棒状のものを、垂直に下ろしながら、回転させる。ヒスイとの接触面には、砥石を含む液体を流し、研磨することで穴を開ける。
 - ・ 加工が長時間に渡り、その間、垂直性と回転を保つことは現在の工作機械の精度レベルが要求される。
- ・ 管玉も、石の丸棒を作り、2mmの直系の面に1mmの穴を垂直加工
 - ・ この加工技術は、ヒスイ穴明け加工技術と同じもの。



茅野市尖石縄文考古館 展示品

翡翠(ヒスイ)と勾玉の加工技術

- 新潟県糸魚川市の長者ヶ原遺跡では、
 - ヒスイの加工を行っていた。
 - 黒曜石の加工も行っていた。
- 長野県の和田峠は、黒曜石の産地であり、
柘榴石・金剛砂の産地。



六ヶ所村立郷土館 舞切り式火起こし



<https://www.youtube.com/watch?v=L3Q0GFJrrgs>

弓ぎり式火おこし
【仙台市縄文の森広場】



<https://www.youtube.com/watch?v=nYd2saRxguY>



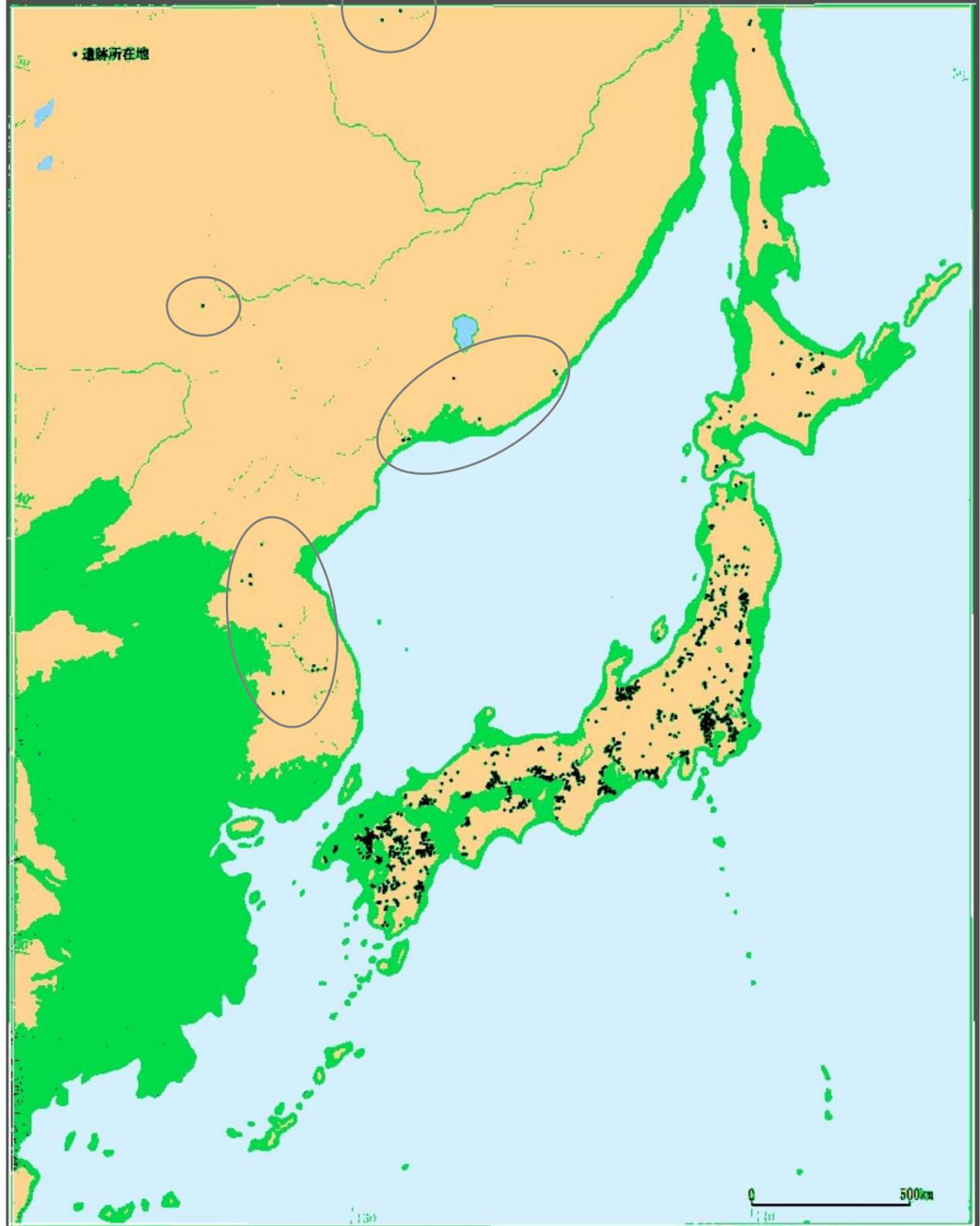
green wood work(グリーンウッドワーク)
足踏みロクロの使い方



<https://www.youtube.com/watch?v=5DTWhK8Laxw&t=147s>

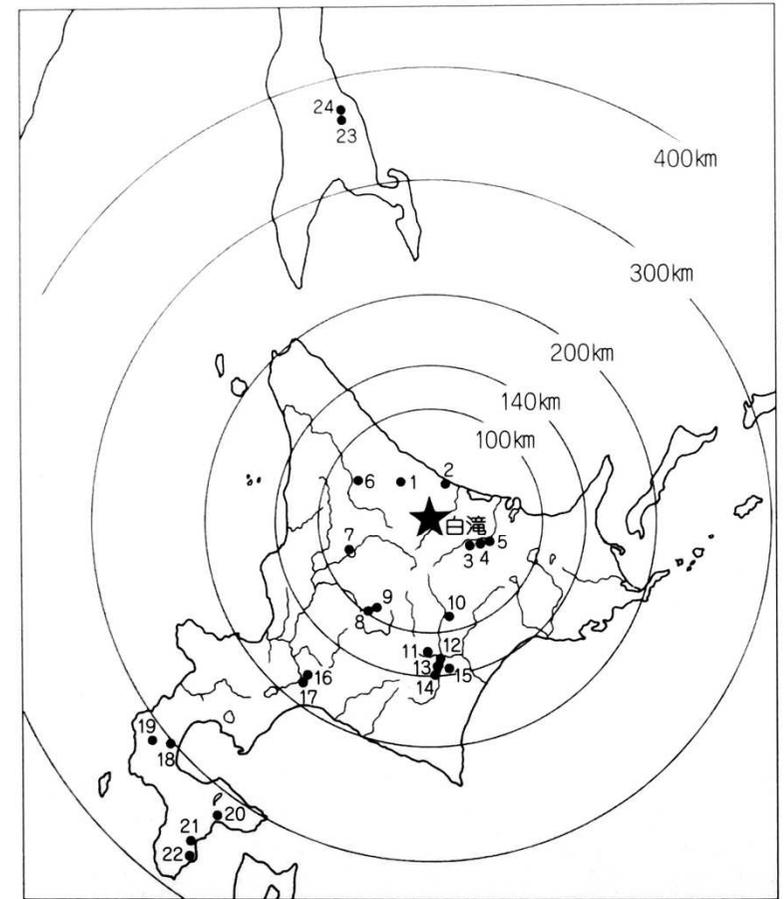
縄文人のDNAが 3地域に存在

- 日本以外の地域で、縄文人のDNAが、3地域で存在していることが、土井ガ浜弥生人の論文に掲載。
 1. 韓国
 2. 東北シベリア
 3. 東南アジア
- 右の図は「図解・日本の人類遺跡」東京大学出版会発行
 - 旧石器 住居と集落
 - 遺跡所在地
 - シベリア大陸と朝鮮半島に存在する旧石器・縄文の遺跡をどう判断するのか、重要問題が含むと考える。



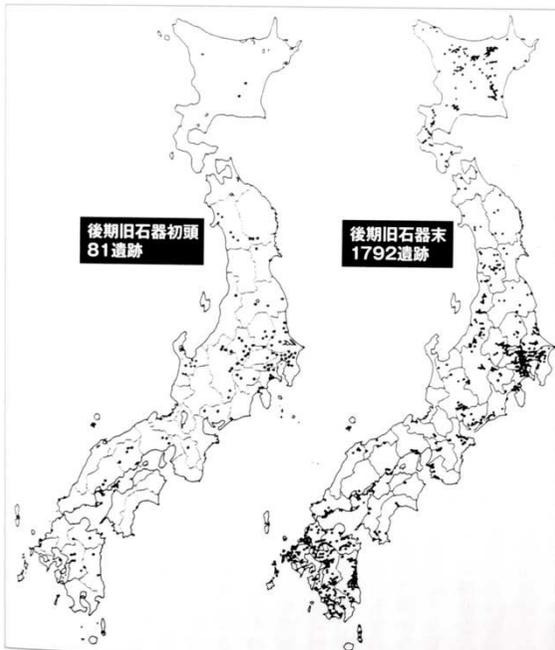
北海道・サハリン・シベリア

- 4万年前に到来した日本先住民は、5千年後に船で、北海島へ渡った。
 - 渡ったのは、少ない家族と推定されている。
 - 石器用の石材として最高品質の黒曜石に遭遇
 - 和田峠や神津島と違い、大量の黒曜石が白滝で露頭。
 - 無尽蔵に近い石器の材料を入手した先住民は、北海道に定着。
 - 氷河期で海面が下がっており、サハリンからシベリアへ徒歩で行くことができた。
 - 白滝の黒曜石製石器がサハリン・シベリヤで多数出土
 - 北海道の遺跡数が3万5千年前と比べ、格段に増大。



白滝産黒曜石の広がり

1.札滑 2.コムケ沼畔 3.吉井沢 4.広郷 5.北上台地 6.日進2 7.嵐山2
 8.東麓郷1 9.東麓郷2 10.嶋木 11.共栄3 12.暁 13.落合 14.帯広空港南
 B 15.上似平 16.祝梅三角山 17.丸子山 18.美利河1 19.神丘2 20.石川
 1 21.新道4 22.湯の里4 23.ソコル 24.ドリンスク I (1・2は推定、3・
 11・15・17・22は未検出)(木村1995より)



後期旧石器時代の遺跡数と人口動態 日本列島において4万から3.5万年前の環状アロック群の遺跡は81か所(橋本2005)、2万から1.5万年前の細石刃石器群の遺跡は1792か所(堀2003)が発見されている。後期旧石器時代の2.5万年間で25倍の遺跡数の増加がつかえ、一定の人口増を物語るデータである。

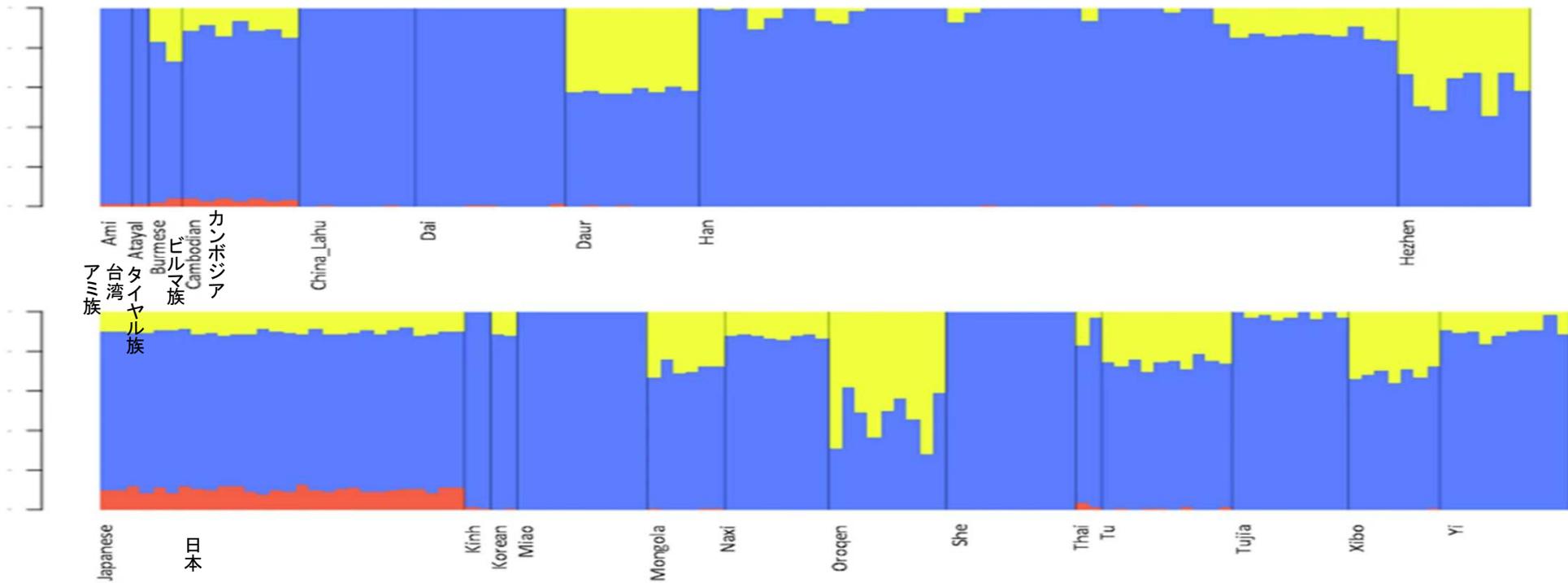


八号沢露頭

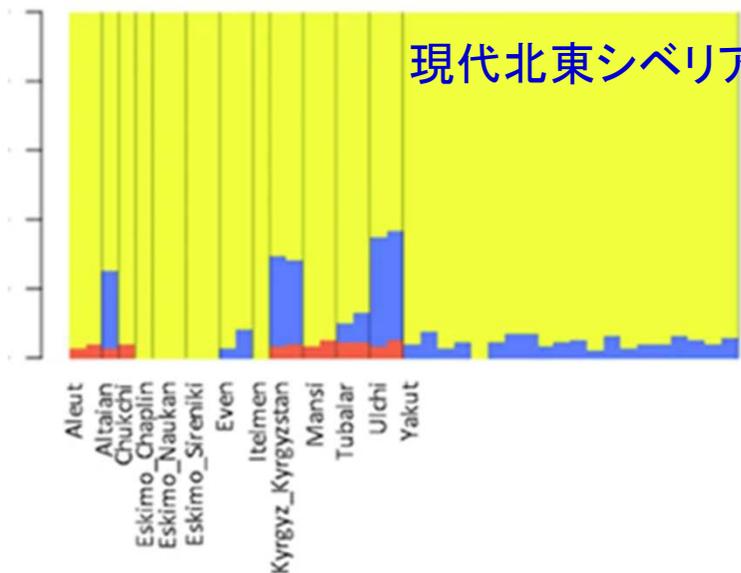
- 北の先住民は、サハリン・シベリヤへ拡散に、白滝の黒曜石と云う最良の石材と、豊富な種類石器を持ち、外の地域の民族を圧倒していた筈で。
 - シベリヤに到来していたシベリアのオロチョン・エバンギ等と交流を持ち、居住していたと考えられる。
 - 但し、その情報は、残念ながら残されていない。
 - 残された情報は、2件。1件は、13世紀の元寇とDNA情報
- ✓ モンゴル帝国(元)は、13世紀半ばから14世紀初頭にかけてサハリンへ断続的に侵攻した。
- ✓ アイヌは、サハリンに留まらず、大陸側のアムール川流域まで渡って、上質の毛皮や鷹羽・鷲羽などの産物を掌握していたため、元朝の北方侵出戦略に支障が出た。
 - ✓ 元によるアイヌ攻撃は、アイヌによる黒竜江流域への侵入を排除するために行われた。
- ✓ 元朝は、3年続けてアイヌ攻撃が行われた。1286年の侵攻では「兵万人・船千艘」を動員したとされ、アイヌ勢力は樺太からほぼ排除されてしまったと元側は主張するが、長くは続かなかった。
 - ✓ 1297年、アイヌが船に乗り、アムール河下流域まで、反撃したが、元軍に敗れた。
 - ✓ 1305年、アイヌが大陸のナムホやチュモ川などを襲撃。
- ✓ 1308年にはアイヌの首長玉善奴(イウシャンヌ)と瓦英(ウァイン)らが、ニヴフの多伸奴・亦吉奴らを仲介として、毛皮の朝貢を条件に元朝への服属を申し入れた。
- 旧石器・縄文時代の遺跡の外には、確定的な証拠は無いが元寇の記録を読む限り、アイヌ(日本先住民)がサハリンや、シベリアのアムール川流域まで、進出していたと伺える。
- DNA情報(前ページ)から見ると、現代北東シベリア人に日本先住民のDNAが残されており、日本先住民の進出状況が明確と言える。

「土井ガ浜DNA論文中の」縄文人の新情報

Modern East Asian

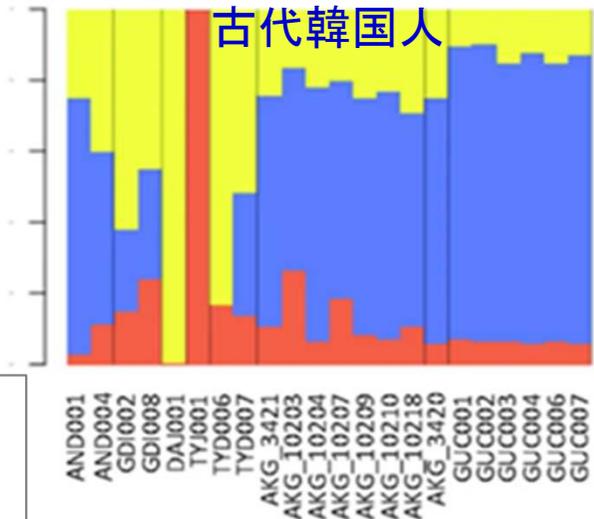


Modern Northeastern Siberian



現代北東シベリア人

Ancient Korean

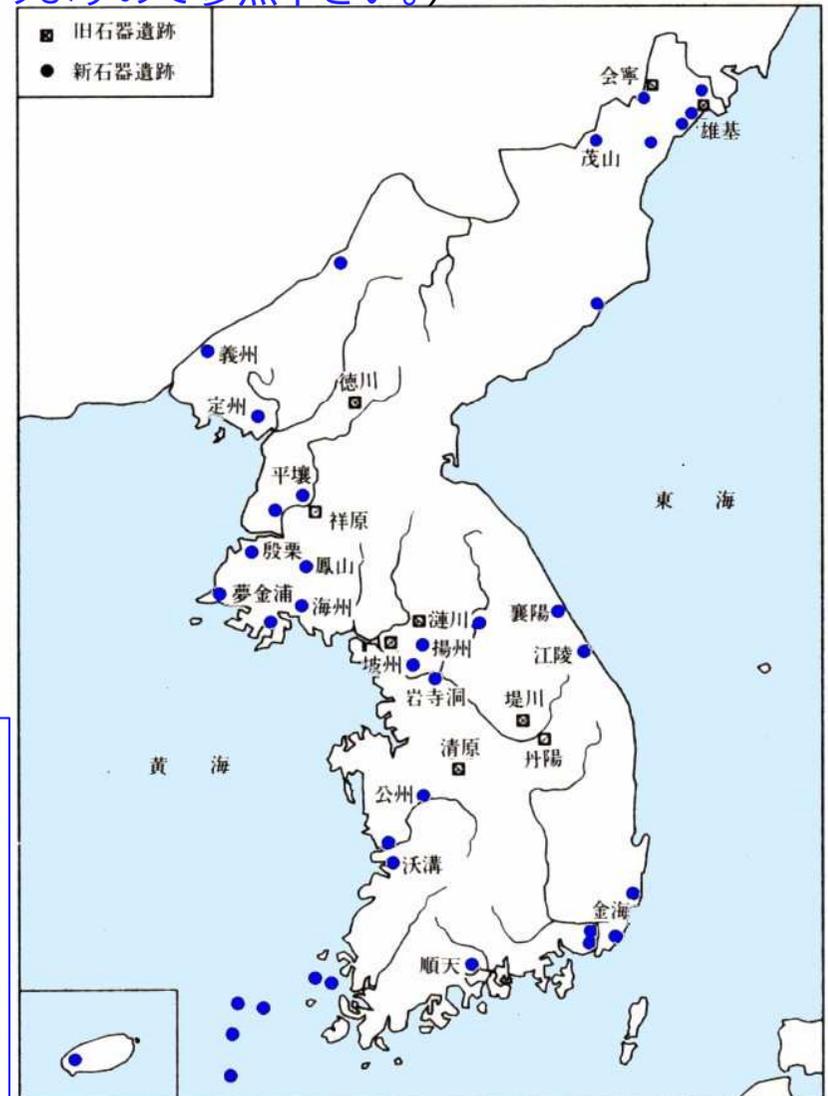
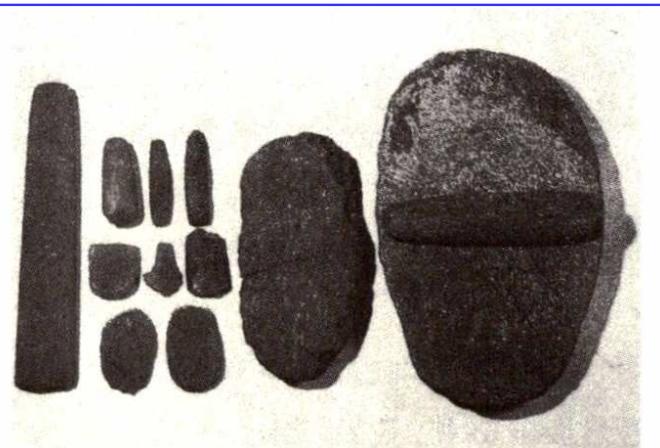
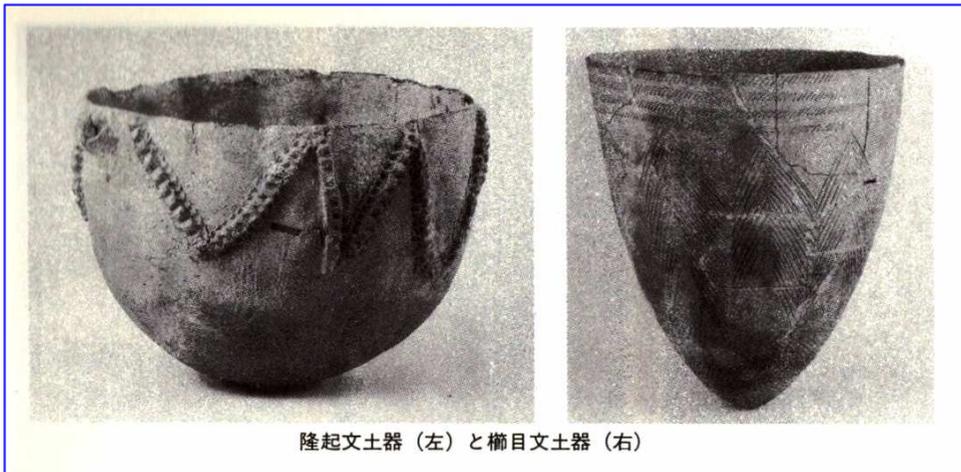


古代韓国人

「弥生時代人の古代ゲノム解析から渡来人のルーツを探る」
 著者: 東邦大・水野文月/東大・大橋順の研究グループ等 による

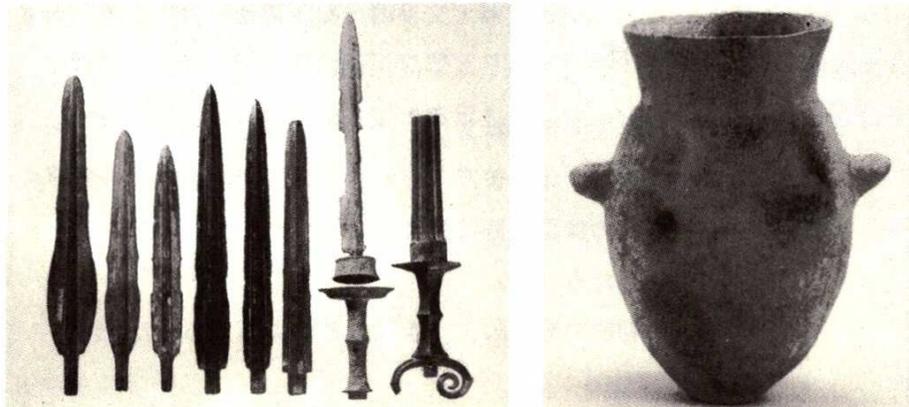
朝鮮半島へ進出した日本先住民

- 紀元前6000年前頃より九州の縄文人が進出し、磨製石器と土器を使った新石器時代がはじまった。
- 新石器時代には、いわゆる無文土器と隆起文土器を作って使用したが、後には、櫛目文土器を使うようになった。
 - この土器は、日本の東北地方を中心とする縄文土器ではなく、九州の縄文土器であった。
(火山大爆発以降の九州の先住民に関する記述が後の頁に有りますので参照下さい。)
- 竪穴住居が使われた。
- 韓国の博物館の記述も、高校教科書も、上記を記載。

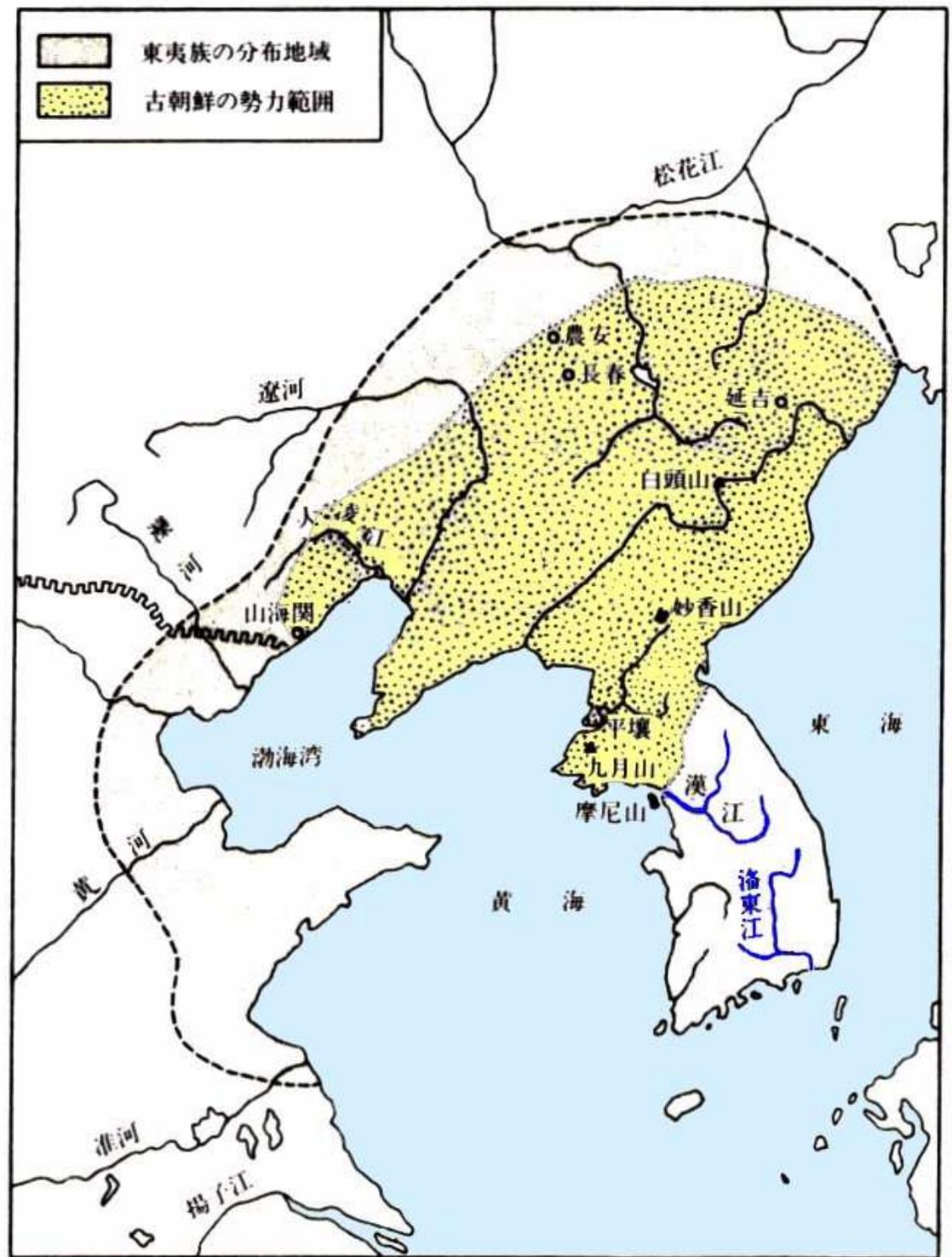


古朝鮮の成立と発展

- 檀君の朝鮮建国:紀元前2333年
- 紀元前4世紀頃に遼寧地方を中心に満州と韓半島北部地域を統治する連盟王国として発展した。
- 衛満が準王を追い出して古朝鮮の王となった。
- 古朝鮮は漢に対抗する勢力として大きくなったが、漢に、紀元108年滅ぼされた。
- 漢は郡県を置いた。
 - 朝鮮民族の反撃を受けて漢は退いた。
- 紀元前10世紀頃、満州では青銅器時代が始まった。青銅剣と青銅鏡があった。
- 遺物と遺跡の分布を見ると、韓半島と満州・遼寧地方の青銅器文化は同じ系統の文化で、中国の青銅器文化とは性格が異なる。
- この時代の土器は無文土器。



青銅剣（左）と無文土器（右）



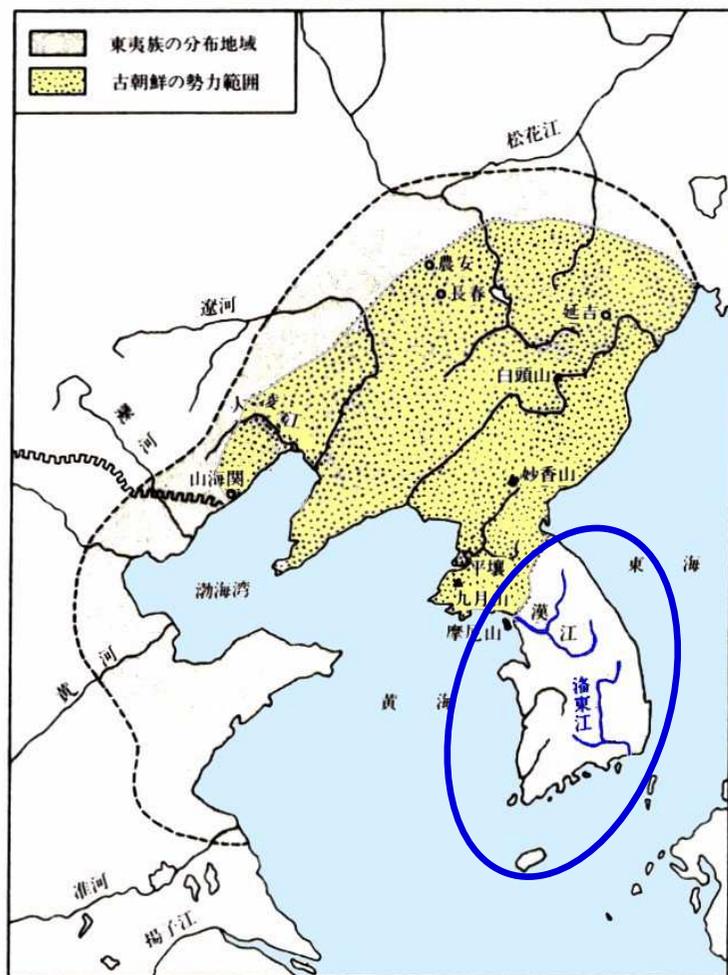
古朝鮮の勢力範囲

韓国の歴史教科書では、漢江以南の地域は空白地帯

- 檀君から衛満朝鮮成立
- BC108年古朝鮮滅び
古朝鮮は黄色の領域
- 漢江以南の地方の記載が無い。
空白地域 {新石器時代～BC108年}

- BC108年古朝鮮滅び
漢が支配(4郡)
- 漢江以南地域へ、
古朝鮮人が逃避・避散
- BC108年～AD313年まで
漢江の南の地域の記載なし
空白地域 {新石器時代～
BC108年～313年}

- 6000年前頃より九州の縄文人
が、朝鮮半島へ侵出し、その石
器・土器・住居が遺跡として残る。
- その後、北朝鮮の地域では、檀
君から衛満朝鮮成立する。
 - しかし、半島の南側は、そ
の勢力が及ばず、縄文人
が継続して居住していた
とみられる。



古朝鮮の勢力範囲



- BC108年古朝鮮滅び、漢が支
配した。
- AD313年の高句麗による漢の
支配脱却
 - 古朝鮮・漢支配は半島の
北側で、南側は、空白地帯
で、縄文人の存在が続い
たものとみなされる。
- 以上の縄文人達の居住が続い
たことが、古代韓国人の中に残
る縄文人のDNAとして、検出さ
れている。

-
- 百濟・新羅の発展は4世紀以降
 - 百濟4世紀に飛躍的に発展。

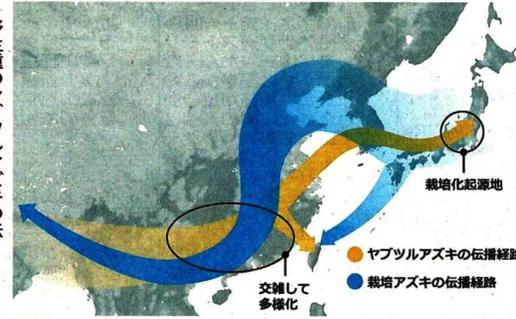
- これは、これまで有力視されてきた「イネやムギと同様に弥生時代に大陸から伝わった」という説を覆す、画期的な成果です。
- ゲノム解析の結果、アズキの栽培化は少なくとも1万年前、縄文時代後期から日本で始まっていたことが判明しました。これは、縄文時代にも農業が存在したことを裏付ける非常に大きな発見です。
- もしアズキが日本で生まれたとすれば、数千年前に日本生まれの栽培アズキを中国本土に伝えた人々は誰だったのでしょうか？

1. 日本における最も古いアズキの出土は、滋賀県の粟津あわづ湖底遺跡(6000年前)からのもの。
2. 次に古いアズキの出土は、福井県の縄文前期(5000~6000年前)の遺跡である鳥浜貝塚からのもの。
3. その後、日本では、青森県の三内丸山さんないまるやま遺跡(4000~5000年前)、鳥取県の桂見かつらみ遺跡(4000~5000年前)、富山県の桜町遺跡(4000年前)、京都府の桑飼下くわがいしも遺跡(3000~4000年前)などからアズキの種子の出土がみられるようになる。
4. 韓国でアズキの種子が確認された最も古い遺跡は韓国慶尚南道キョンサンナムトの南道遺跡(5000年前)
5. 中国において発掘された最古のアズキ種子は、山東半島龍山文化の両城鎮りょうじょうちん(Liangchengzhen)遺跡(4000年前)から発見されたもの。

アズキ栽培 日本発祥だった

ゲノム解析 大陸説覆す

赤飯や和菓子のあんこに欠かせない作物、アズキの栽培の起源は縄文時代の日本だったと、農研機構(茨城県つくば市)と台湾大学の研究チームがゲノム解析で突き止めた。イネやムギと同様に弥生時代に大陸から伝えられたとする説を覆す成果だ。論文が米科学誌サイエンスに掲載された。



野生種のアズキの伝播(オレンジ)と栽培アズキの伝播経路(青)の伝播経路。農研機構提供

日本でのアズキの栽培は、農耕民である弥生人が到来する前に始まっていた可能性を示しており、それ以前に日本にいた縄文人が純粋な狩猟採集漁民ではなかったとする考古学上の説を補強する内容ともいえる。



ヤブツルアズキ(左)と栽培アズキ=あずきミュージアム提供

研究チームは、アジア各地で栽培されているアズキとその祖先にあたる野生種のアズキについて全ゲノム解析をした。父方(花粉)由来は分かれ、母方(胚珠)由来の遺伝子だけが受け継がれる葉緑体ゲノムを調べたところ、中国と日本の栽培アズキは、いずれも日本のヤブツルアズキと遺伝的に同タイプで、中国のヤブツルアズキは明確に異なっていた。つまり、野生種のアズキから栽培アズキが日本で生まれ、それが中国へ持ち込まれたことが明らかになった。



ヤブツルアズキの種子(左)と栽培アズキの種子。高橋有さん提供

日本での栽培アズキについて、全国各地の野生種のアズキと栽培アズキとの遺伝的な違いを調べたところ、北関東から南東北にかけて分布するヤブツルアズキと近かった。また、共通する祖先から受け継がれる突然変異の割合が約5千~3千年前に急激に減っており、このころ野生種のアズキから栽培アズキが誕生したと考えられる。このことから人間が選別を行うようになったと考えられ、アズキの初期的な栽培が少なくとも1万年前には始まった可能性があるという。

研究チームの内藤健・

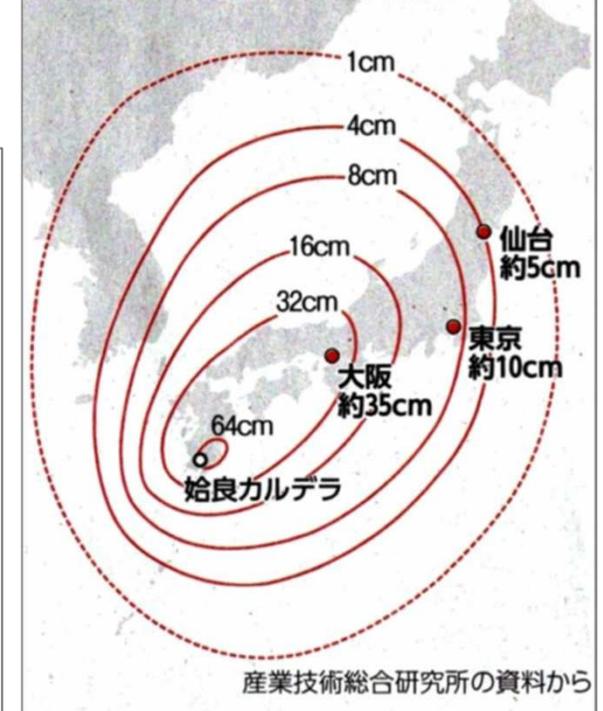
農研機構上級研究員(植物遺伝学)は「多くのみなさんにも知ってもらいたい、休みの日に喫茶店や和菓子を食べながら、話題にしたいだけじゃなく『楽しい』と話している。」
(桜井林太郎)

生したと考えられた。また、黒みをおびているヤブツルアズキと違って、栽培アズキはより赤いのが特徴だが、種子が赤くなる遺伝子の突然変異の頻度を調べたところ、約1万3千年前から増え始めていた。このことから人間が選別を行うようになったと考えられ、アズキの初期的な栽培が少なくとも1万年前には始まった可能性があるという。

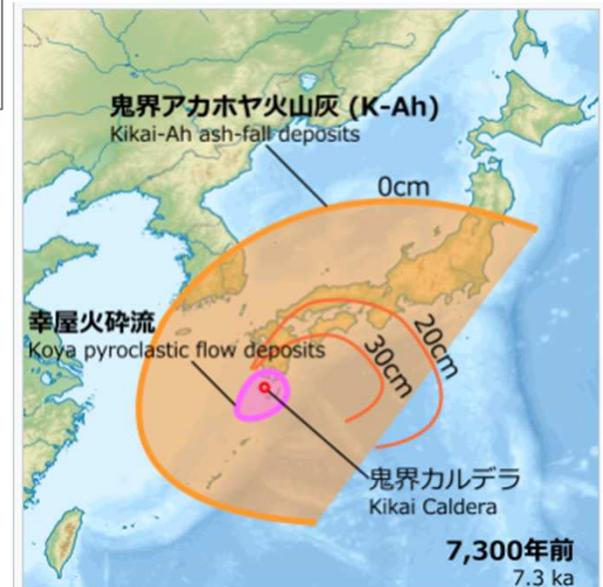
日本先住民到来以降の日本・九州の主な出来事

- 遺跡の発見によって、日本先住民の活動が判明している。
- 海洋民族であった旧石器人(後の縄文人)は4万年前に日本に到来。
 - 3万8千年前/黒曜石獲得のため、伊豆の神津島まで往復航海
 - 磨製石斧を使用。黒曜石を活用。世界的に稀に見る早い時期に石器を開発し、道具として活用
 - 3万5千年前、北海道へ渡り、サハリン・シベリアまで拡散。
- 3万年前：鹿児島湾の始良カルデラ大爆発発生。
 - 火砕流・火山灰被害甚大
 - 九州から四国・中国まで、壊滅的被害(先住民滅亡)。・・中部地方まで被害を甚大。
 - 6千年後の2万4千年前、鹿児島湾の北側に旧石器人の遺跡(耳取遺跡)誕生。
 - 到来した先住民は、始良カルデラ被害の少なかった東北・関東から来たとは考えられない。被害の無かった沖縄諸島から、舟で到来したものと推定される。
 - 鹿児島半島に梶ノ原遺跡誕生。定住集落を形成、煙道付炉穴を有し、南方文化を有する。隆帯文土器を残す。
 - 梶ノ原石斧(丸のみ型石斧)は1万4千年前に沖縄本島で開発、奄美大島に生産基地あり。
 - 梶ノ原へ来た先住民は、沖縄列島から来た旧石器人と考えるのが妥当。(沖縄で旧石器人消滅せず)
 - 桜島の爆発でサツマ火山灰で消滅

3万年前の噴火での各地の降灰量



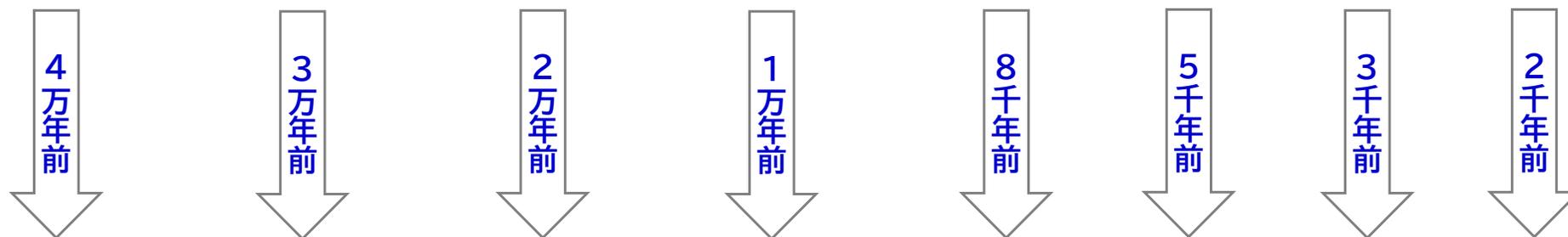
始良カルデラ爆発の火山灰被害の範囲



沖縄・琉球の古代史の見直し

- 「沖縄の旧石器人の絶滅説」が虚偽と認識され、消滅したことから、沖縄の古代史が見直されることになる。その前に、行うべきことは、日本本土と沖縄の関係を見直すこと。
- まず、4万年前から歴史年代までの、重大な事象を見直す。

注意：年代は、最新科学の成果で、大幅な修正が入っています。



過去

-----日本・九州の重大事件-----

→

現代

旧石器人 沖縄・日本本土に到来

旧石器人 北海道へ 樺太・シベリアへ

始良カルデラ爆発 九州・四国 中国被害

鹿児島県 耳取遺跡 2万4千年前

梅ノ原遺跡 丸のみ型石斧 南方文化集落

一万二千年前 桜島のサツマ火山灰で埋没

九千五百年前 上野原遺跡が形成

七千二百年前 鬼界カルデラ噴火 アカホヤ

焼畑農業 米・ヒエ・アワ・豆
黒河式土器・
甕式土器

西北縄文人(縄文人と弥生人混血)

一次水田稲作 支石墓

一次水田稲作 金属器 甕棺墓 弥生文化

高天原・天孫降臨

出雲国譲り・神武東征 大和政権誕生

梶ノ原遺跡



出土した丸ノミ形石斧。世界最古の舟作り工具とされる(南さつま市教育委員会提供)

薩摩硫黄島



鬼界カルデラの外輪山の一部。活火山島でかつては鬼界ヶ島と呼ばれた



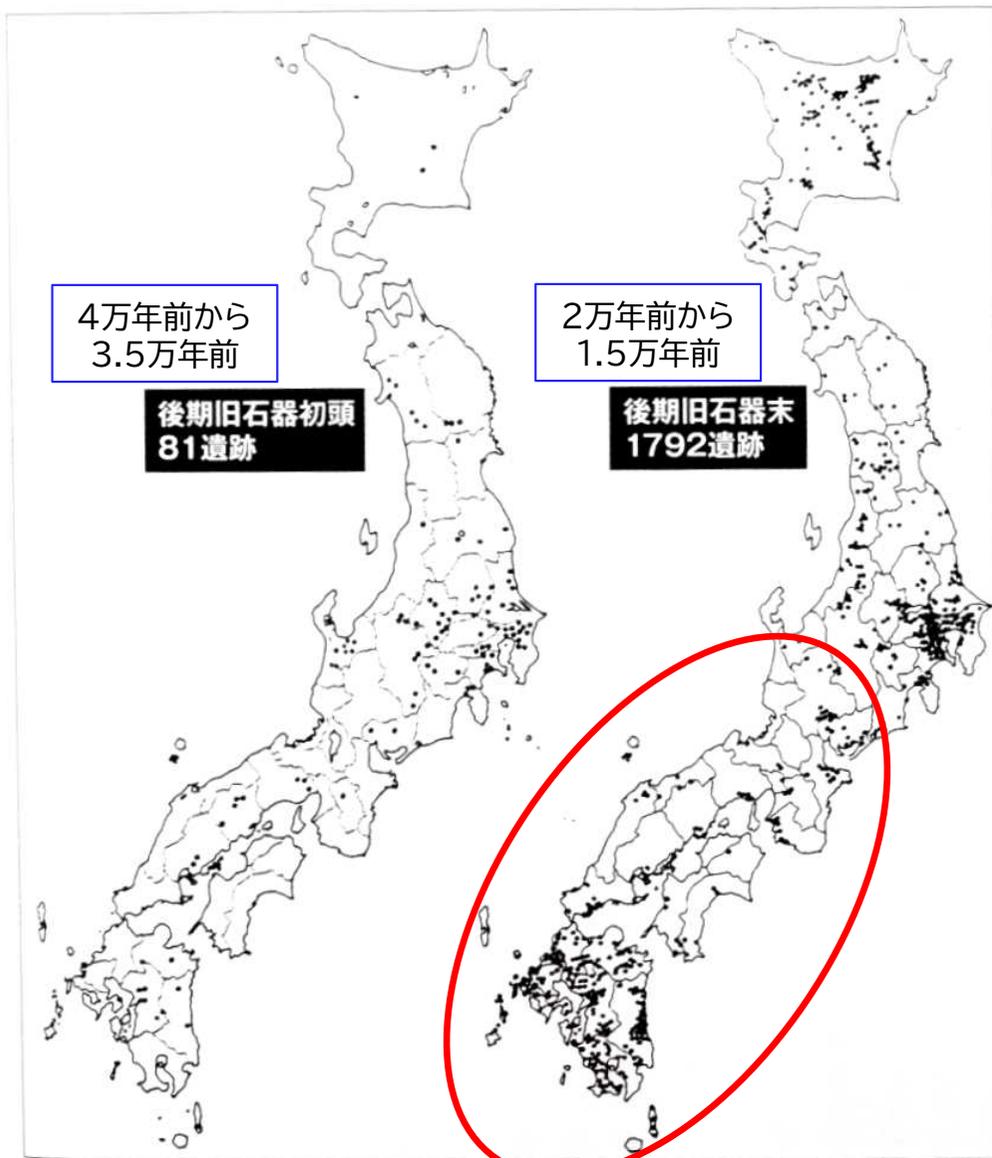
上野原遺跡



復元された縄文早期の竪穴住居集落(写真提供：鹿児島県上野原縄文の森)

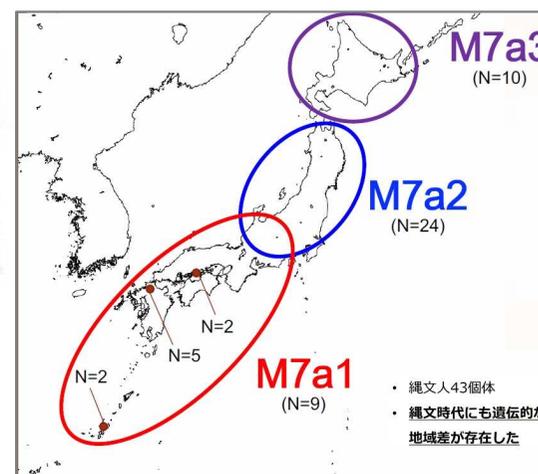
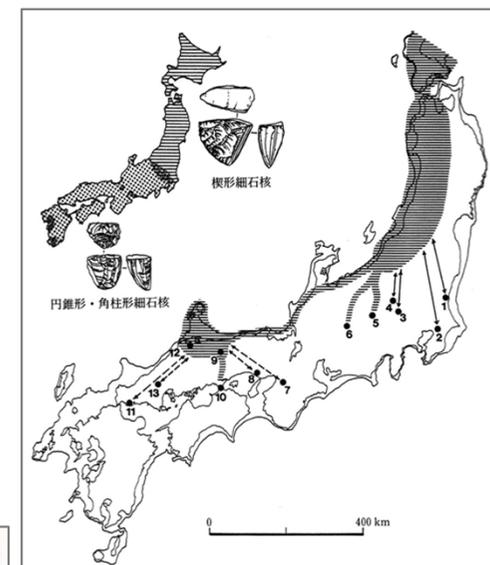
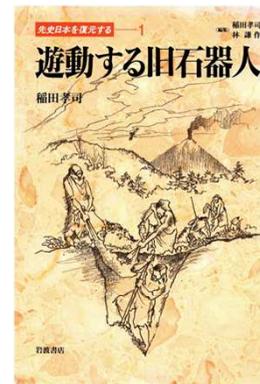


出土した約9500年前の貝殻文様の平底土器(写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター)



後期旧石器時代の遺跡数と人口動態 日本列島において4万から3.5万年前の環状ブロック群の遺跡は81か所(橋本2005)、2万から1.5万年前の細石刃石器群の遺跡は1792か所(堤2003)が発見されている。後期旧石器時代の2.5万年間で25倍の遺跡数の増加がうかがえ、一定の人口増を物語るデータである。

堤 隆著「列島の考古学-旧石器時代」
河出書房 より



・縄文人43個体
・縄文時代にも遺伝的な地域差が存在した

←神澤秀明氏の講義資料より

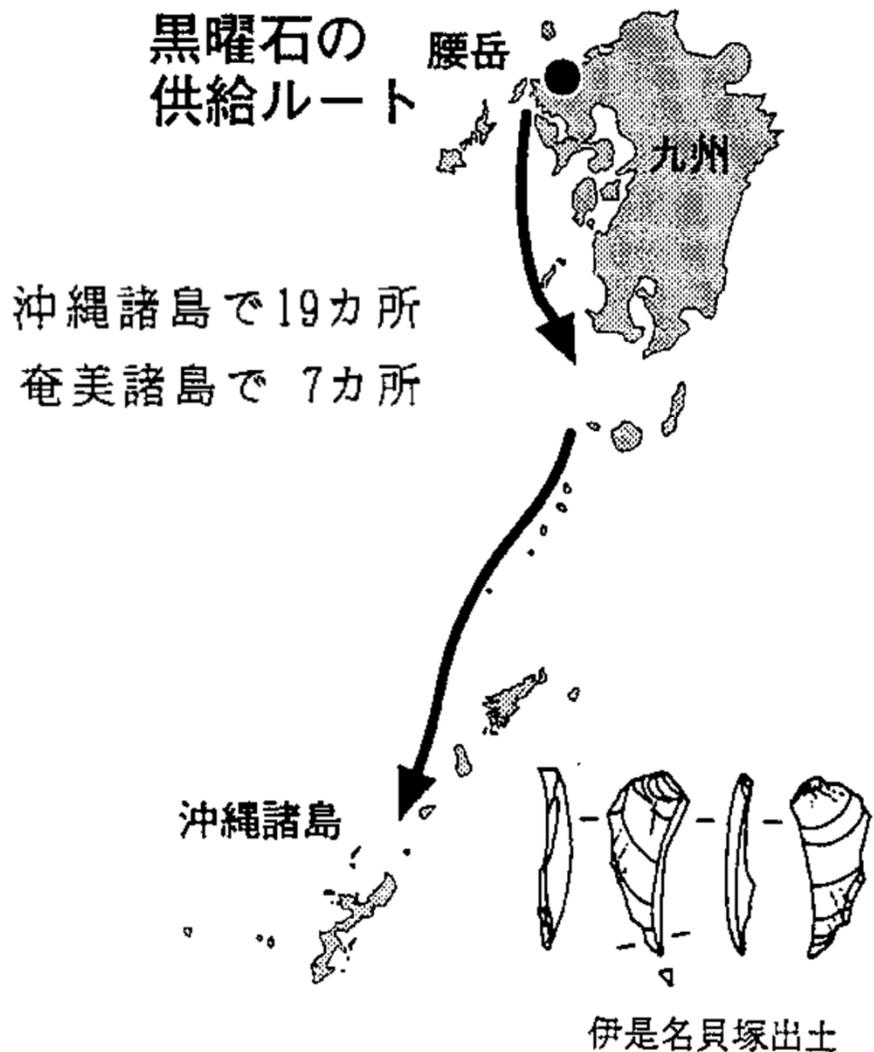
67 黒曜石遺跡リストの推定 (上) 小野の推定

日本先住民到来以降の日本・九州の主な出来事-2

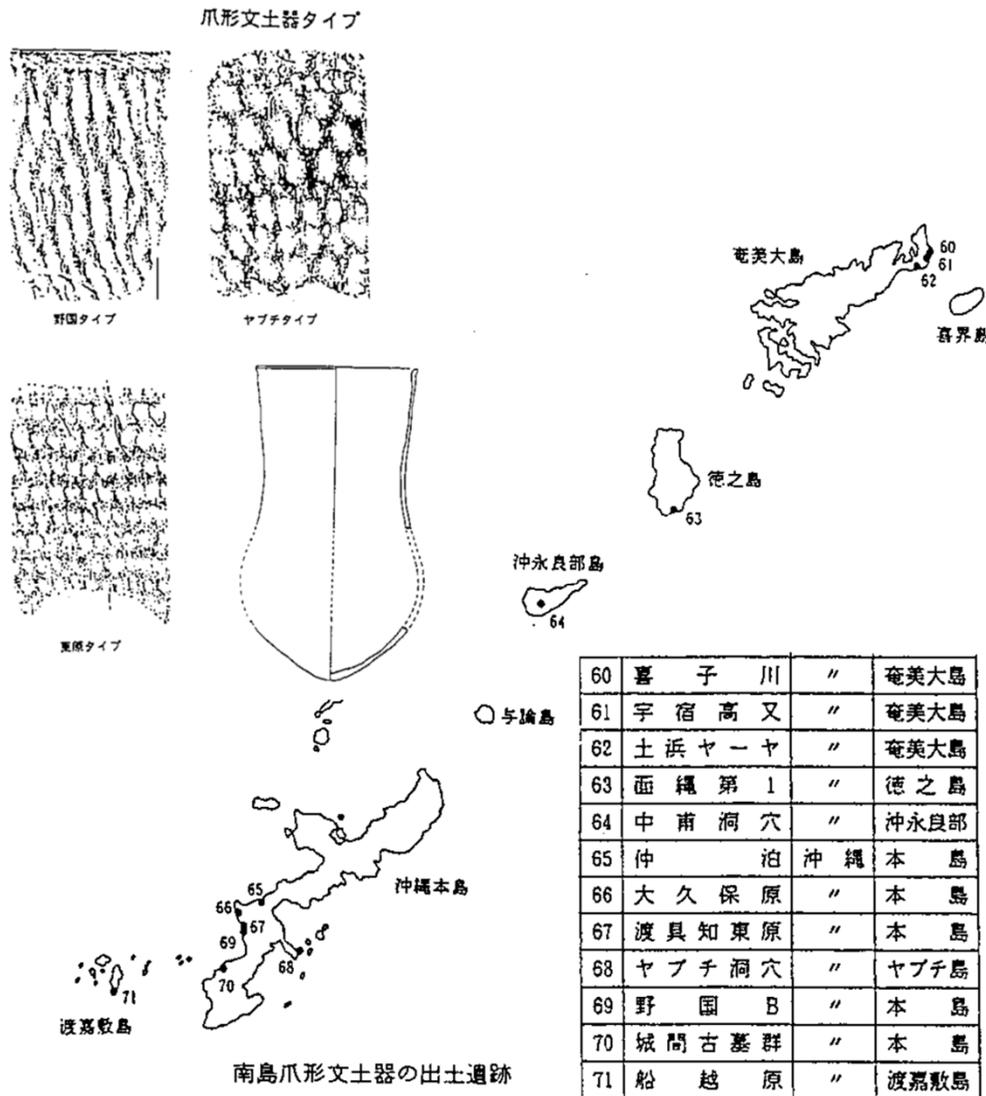
- 鹿児島・薩摩湾の北側に上野原遺跡誕生。9千5百年前。耳取遺跡の西側近く。
 - 7千3百年前、鬼界カルデラ大爆発でアカホヤの被害を被るが、人と遺跡は継続。
 - 熊本・長崎には、縄文人の住居遺跡拡散(甕式土器)。長崎には丸のみ型石斧多し。
 - その後、鹿児島から福岡県まで黒川式土器(黒色磨研土器)が拡散。
 - 九州北部まで、縄文人の住居と遺跡が拡散し、焼き畑農業が行われ、米、ヒエ/アワ、豆など栽培。

- 3万年前の始良カルデラ爆発で人の消滅した九州・四国・中国地方に、再到来したのは、海洋民族である沖縄・旧石器人
 - 2万4千年前から、鹿児島湾の北側の耳取遺跡に到来し、九州から人口を増やしていった。
 - 1万4千年前から、同じく沖縄から、更に進歩した丸のみ型石斧を持って到来。
 - 梶ノ原遺跡では、東北の縄文土器と異なる土器(貝の刻み文様あり)を使用
 - 1万3千年前に桜島サツマ火山爆発で、火山灰に埋もれる。
 - 9千5百年前から、上野原遺跡に沖縄・旧石器人(縄文人)が到来し、新しい貝殻文の土器を使用
 - この時期から、朝鮮半島に多くの遺跡と縄文土器・石器が見つかる。上野原遺跡と同様の土器。
 - 広田人と呼ばれる縄文人らしい体系と顔付をした人々が居住。
 - 7千3百年前、鬼界カルデラ大爆発
 - これ以降に到来した沖縄からの民族は、旧石器・縄文人ではなく、西北九州縄文人・弥生人と呼ばれる弥生人のDNAを持つ縄文人と思われる。
 - 黒川式土器(黒色磨研土器)・焼き畑農業
 - 大友人と呼ばれる縄文人らしい体系ではあるが、少し顔付が違う人々。
 - 後の弥生時代まで生活し、西北弥生人と呼ばれた。

黒曜石の流通 (12,000～ 2,000年前)



南島爪形文土器文化 (7,000～ 6,500年前)

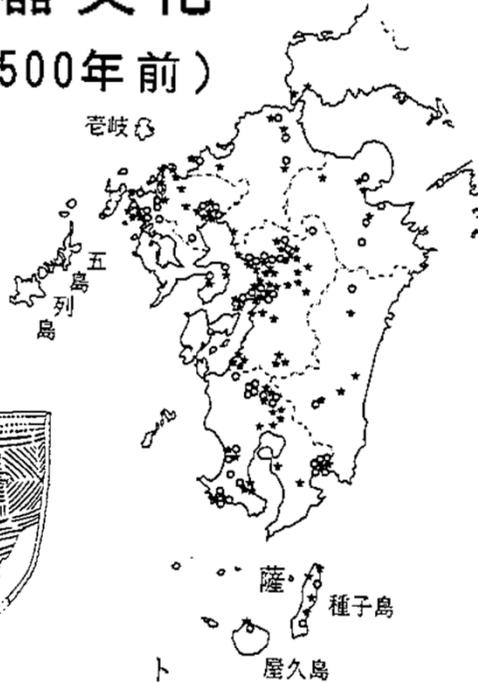


曾畑式土器文化

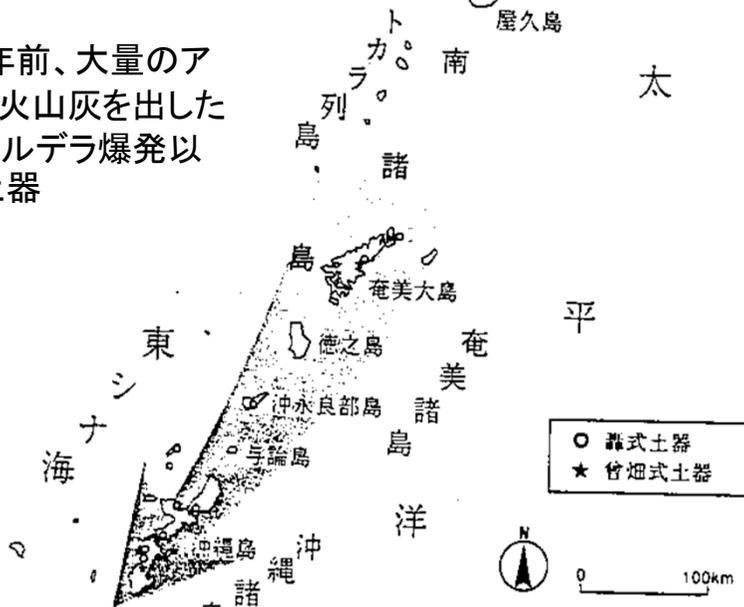
(6,000 ~ 5,500年前)



曾畑式土器



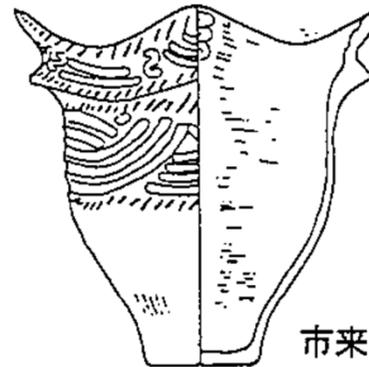
6,300年前、大量のアカホヤ火山灰を出した鬼界カルデラ爆発以降の土器



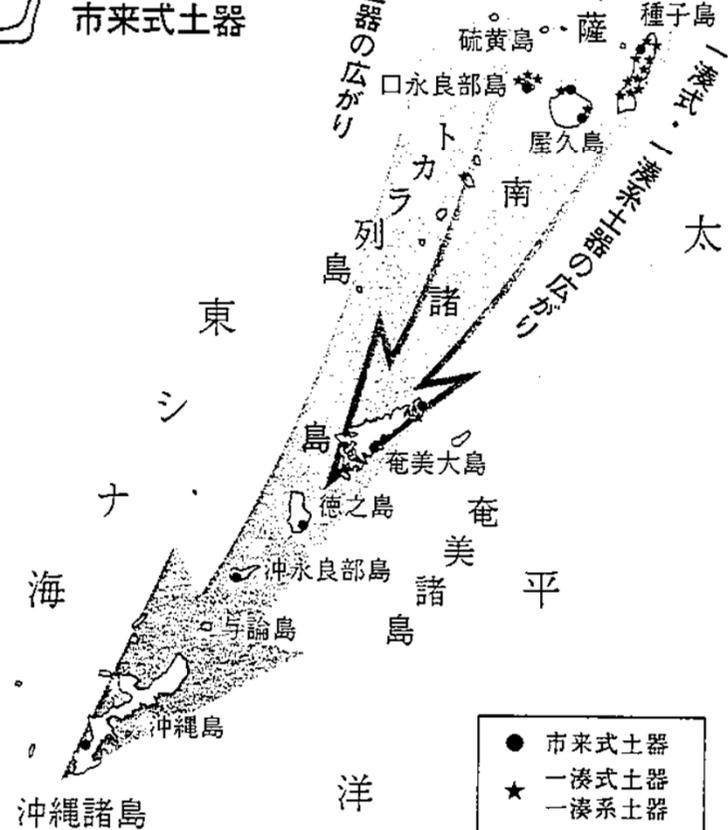
曾畑式土器の伝播

市来式土器文化

(3,500 ~ 3,000年前)



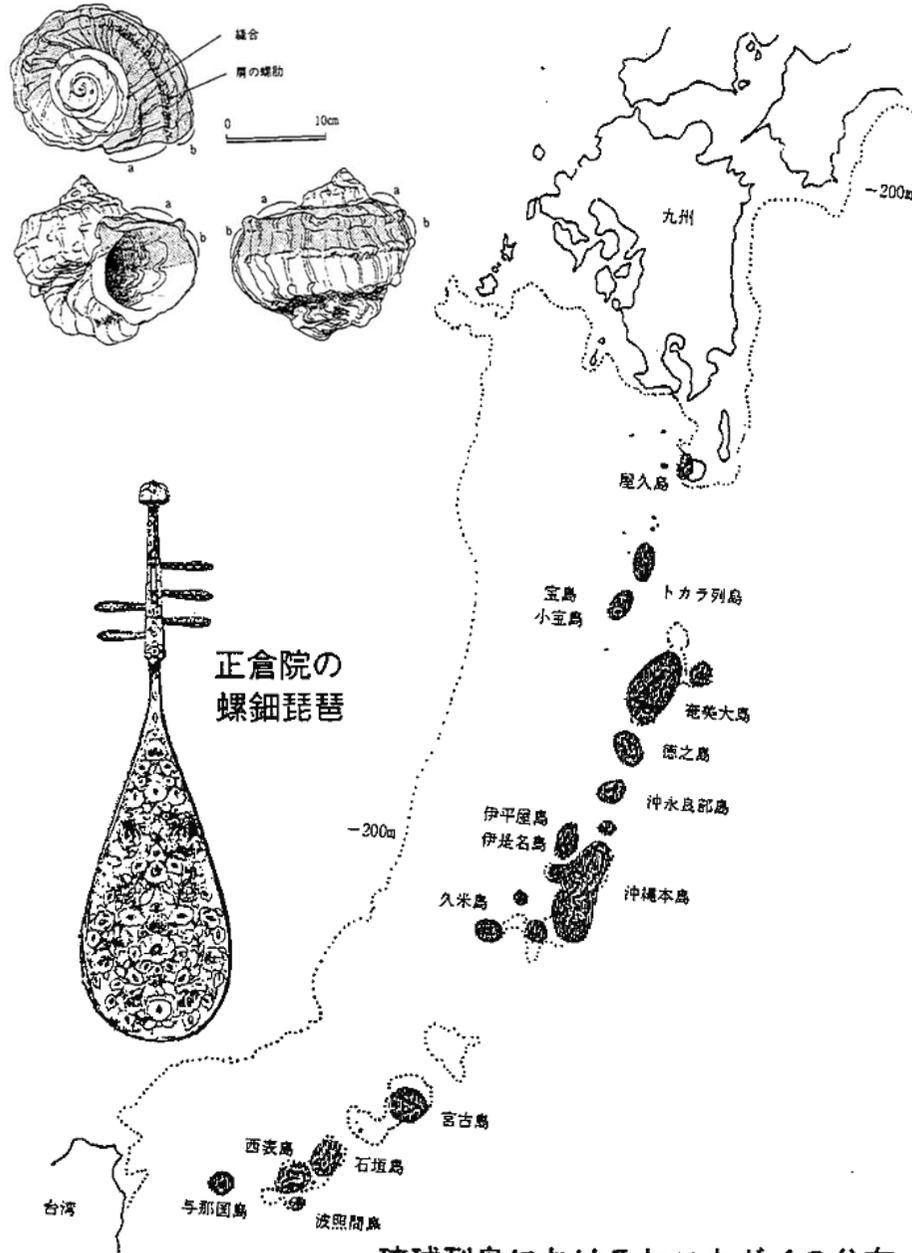
市来式土器



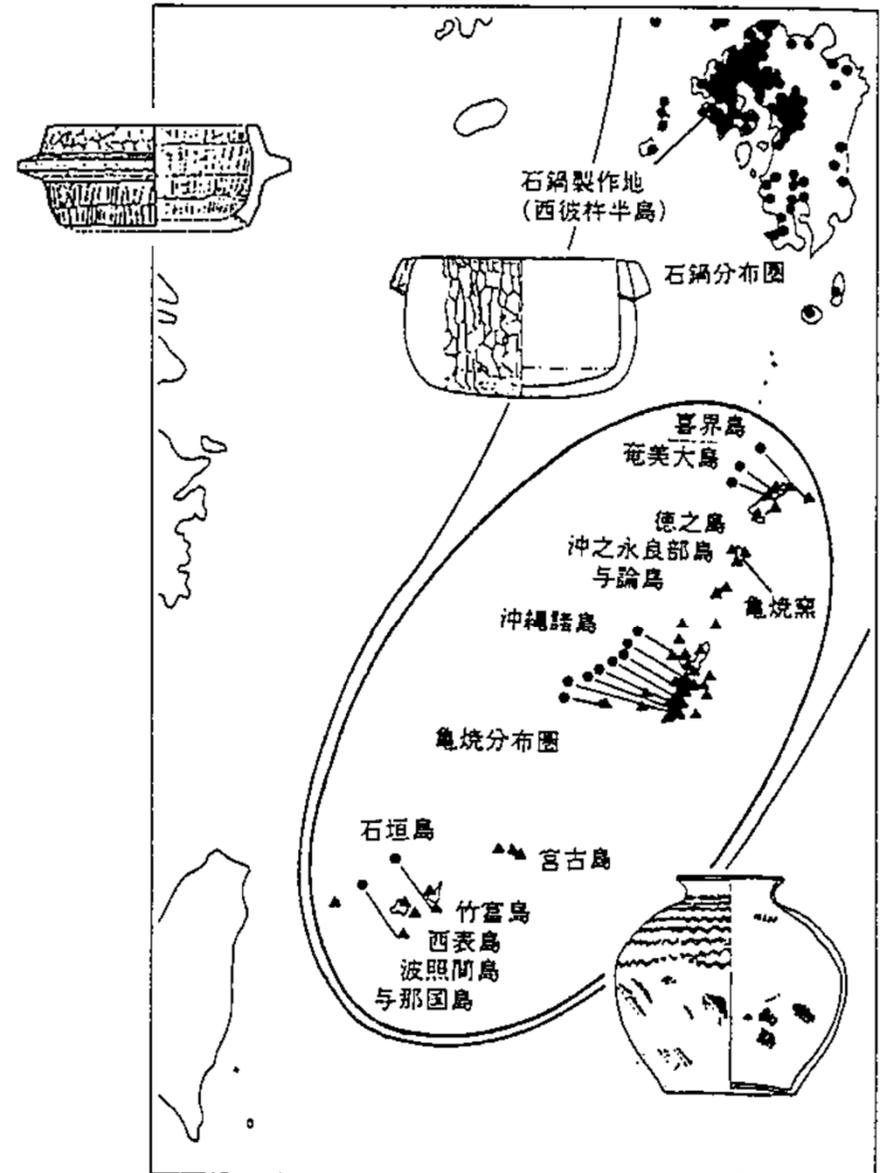
● 市来式土器
★ 濠洲式土器
▲ 濠洲系土器

ヤコウガイの交易 (7~14世紀)

滑石製石鍋・カムイヤキ交易 (11~14世紀)



琉球列島におけるヤコウガイの分布



亀焼と石鍋の分布圏

中国の黒陶が九州で出土

- 河姆渡文化(7000～6500年前):黒陶・灰陶など、1000度以上の高い温度で焼いたものが見られる。粳穀と稲、葦の茎と葉を炭化し、陶土に焼いたもの。
 - 黄河域の龍山文化期(5000-4000年前)の黒陶より以前。轆轤(ロクロ)で成型、表面を研磨し光沢を出した。



黒陶釜
河姆渡文化



大石遺跡・大分県豊後大野市
別府大学付属博物館所蔵

- 九州・熊本の複数遺跡で「縄文後期黒色研磨土器」が出土 (賀川光夫氏の同名レポートによる)
- 熊本県菊池市天城遺跡、福岡市四箇遺跡、大分県駒形遺跡、長崎県筏遺跡、宮崎県陣内遺跡など
縄文時代後期後半から晩期

(3200～2400年前)

- 周湟(溝・堀)で囲む集落構造を持つ
- 甕棺で埋葬(小児)
- 石包丁・石斧
- 天城遺跡では、米のプラントオパール検出
(鹿児島市から南へ533kmの徳之島の遺跡)

【後期磨研土器Ⅰ式(三万田式)の集落立地と遺物】

	遺 跡	立 地	集 落			石 器			石 棒 そ の 他	土 偶
			住居	溝	カメ棺	打製 石包丁	石斧 (石鋸)	石鎌		
1	三万田	低丘陵	○	○	△	◎	○			○
2	天城	低地	○	○	◎	◎	○		△	○
3	四箇	低地	△	○	○	○				
4	筏	低丘陵	△	△	◎	◎	○			
5	駒形	高地	△	△		◎	○			○
6	陣内	高地				◎	○	○	○	○

◎ 多数 ○ 普通 △ 存在

古代の「中国と沖縄・日本」の交流

- 日本の米・稲作に起源について：
 - 日本の古代米＝熱帯ジャポニカ米の、中国より 沖縄諸島へ入り、日本本土へ拡散
 - 日本の米の最も古い痕跡は、岡山で発掘された6400年前の稲プラントオパール
- 漆について：
 - 日本では、12,000年前に漆の枝が遺跡から見つかり、7000年前の漆製品が出土。
 - 中国の河姆渡遺跡では、約6200年前に漆椀が発掘された。
- 翡翠について
 - 約5～6000年前の土器と共に、ヒスイのペンダントが山梨県天神遺跡から出土。→
 - 約3500年前の沖縄県兼城上原遺跡から翡翠が出土。新潟県糸魚川産の翡翠と判明。
 - 崧沢文化(紀元前3800年? - 紀元前3500年?) 玉による装飾品
 - 良渚文化(紀元前3500年? - 紀元前2200年?) 多数の玉器。



- 玦状耳飾の流行
 - 河姆渡遺跡などで6000 年前から4000年前まで、
「玦」が流行し、衰退
 - 縄文時代前期(6000 年前から4000年前)に同様に流行し、
衰退



「山形県内出土の玦状耳飾について」 小林圭一著より

類型	浮輪形	金環形	「有明神社」型	指貫形	円盤形・玦状	三角形	楕円形
時期							
早期	後葉						
	末葉						
前期	初頭						
	中葉						
	後葉						
中期	初頭						
	中葉						

図1 玦状耳飾編年模式図 (川崎 2004) 改変

沖縄と九州・本土との交易

- 「沖縄と本土との交流-1～3」、「中国の黒陶が九州で出土」、「古代の「中国と沖縄・日本」の交流」により、沖縄と九州・本土との交易・交流は、1万2千年前から継続して行われてきたことが判明。
 - 従来の沖縄関連の学会資料では、「旧石器人絶滅」した沖縄諸島に、九州から縄文人・弥生人が運んだとの評価になっていたが、「絶滅」が否定されたため、沖縄と九州・本土との交易との評価が確定した。
- **翡翠(ヒスイ)**については、3500年前のヒスイが出土したことは、沖縄人が日本海を經由して糸魚川のヒスイを輸入したことになる。
 - ヒスイは、宝石の硬度を示すモース硬度で6.5～7で硬い。水晶よりは硬度は低いが、**靱性(じんせい)**が強く、ダイヤモンドより靱性の強いサファイアを上回り、**宝石の中では一番割れにくい石**です。
 - 現在は、東南アジア産などが有るが、歴史的には、日本の糸魚川産が唯一使用された。
 - 縄文時代のヒスイは穴明け加工されているが、硬い石に垂直に穴を明ける技術は、日本にしか存在しなかった。(垂直にドリル・工具を立て、回転する“工具”を作成。(火を起こす回転式道具に類似)ドリル・工具の代わりに竹・木材を使う。ドリル・工具の代わりに、**研磨粉を水で溶き竹・木材の工具とヒスイの間に注ぎながら、回転によって、研磨粉の粒子が、ヒスイの表面を削る**。この作業を根気よく行うことで、ヒスイに、垂直に穴が開く。研磨用には金剛砂(柘榴石の粉)を使う。糸魚川から近い、長野県和田峠・霧ヶ峰付近に金剛砂の産地有り。
 - ヒスイの穴明け作業の秘密(上記)を知ることが出来れば、特別な力を得ることになる。
 - 中国の崧澤文化(5800年前～5500年前)の玉製品の加工技術は、沖縄経由で伝わった可能性あり。
- 漆(ウルシ)は日本では12,000年前から実用化
 - 鳥浜貝塚(福井県)でウルシの木が出土
 - 7000年前に中国河姆渡遺跡で出土
 - この技術も、日本から、沖縄経由で伝わった可能性が有る。
- ✓ 沖縄の海洋交易によって、有用な技術や製品が、日本の日本海側から、沖縄へ、又更に中国の揚子江流域に伝わった可能性が有る。
 - ✓ 沖縄と中国の交易で最も重要度の高い製品は、宝貝と云える。その実態を探る材料を以下に記す。

宝貝



貝	貯	財	賄
賄	賭	賞	賚
貨	貸	買	賣
質	購	贈	贄
賤	寶	贖	賴

一個の宝貝で、羊が5-6頭
(中国:殷・商の時代)

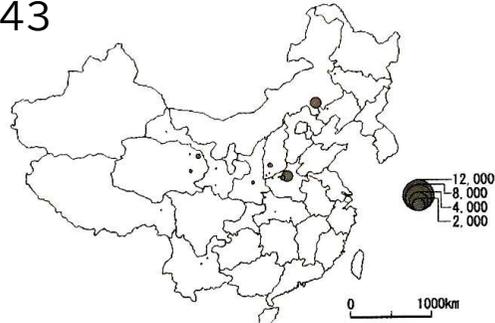
上と右 雲南出土の貯貝器
中国国家博物館名品展「悠久の美」より借用



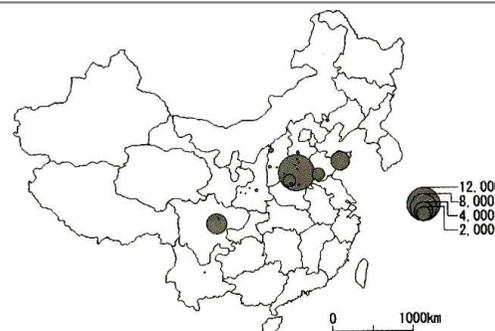
宝貝は、沖縄から中国へ

- 筑摩書房「貨幣の条件-タカラガイの文明史」 学習院大学・上田信著 2016年発行
以下の事実を明らかにした。
 - 元の時代に、中国では、宝貝が通貨と使用されていたこと。
 - 琉球王朝がその交易を行っていたこと。
 - 琉球側の記録は、琉球王朝の外交資料『歴代宝案』中に残されている。
 - 元側の記録は、「元史」に記載されていること。
- 中国の宝貝の歴史は、数千年前から始まる。今まで、中国と日本の歴史家が明らかにしようと試みてきたが、成功しなかった。
 - しかし、最後に使われていた宝貝は、沖縄で生産されたことが判明した。
 - 初期の宝貝の供給元はどうだったのだろうか？
- -----
- 「貨幣の条件-タカラガイの文明史」に記載された事実は下記のものがある。
 - 明の時代1434年には、宝貝交易の記録が、琉球王朝の外交資料『歴代宝案』中に、明瞭に残されている。
 - 『元史』『世祖本紀』には「1282年、雲南で賦税を定めるに辺り、金を規準とし、貝で換算して収めさせた。
 - 『元史』『食貨志』に1382年雲南省から納められた税収が「20万1千1百17索」。税収とタカラガイは莫大な数。
 - 『歴代宝案』によると、1434年の朝貢に際して琉球の使節は〈海巴〉(タカラガイ)の規定の量550万個と、追加分として38万8465個を福建に持ち込んでいる。
 - 1611年に濟州島に漂着した船のエピソード：漂着船にはタカラガイなどが積載、船に満載された宝物に目を奪われ、乗組員を虐殺して「貝貨」(貝と貨物)を没収した。

宝貝は夏の時代から急増

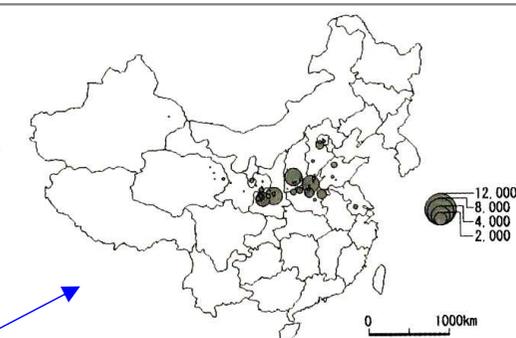
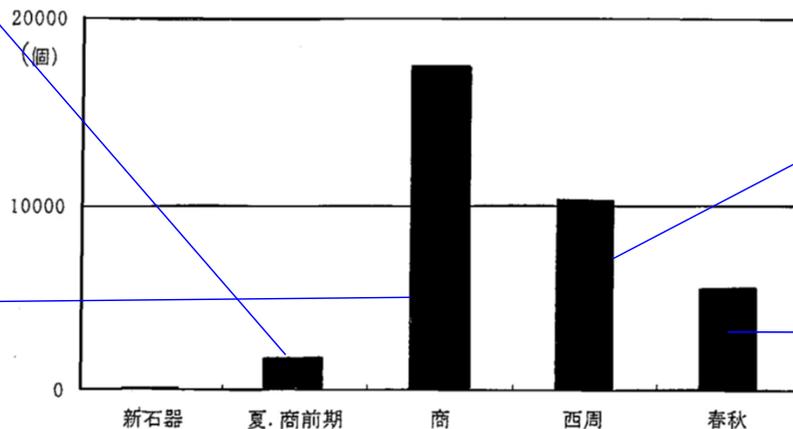


〔図2〕 殷代以前の宝貝・倣貝出土地

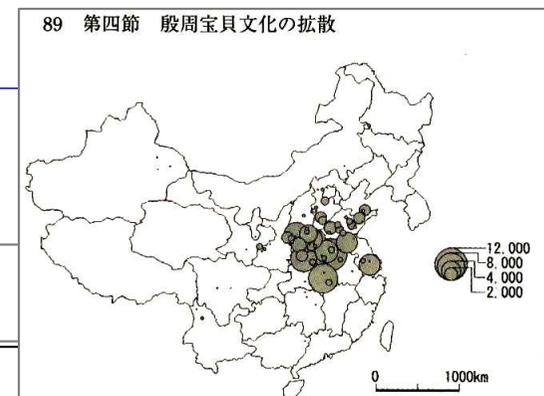


〔図3〕 殷代の宝貝・倣貝出土地

图2 中国宝貝消費动向(出土个数 总数 35096 个)



〔図4〕 西周時代の宝貝・倣貝出土地

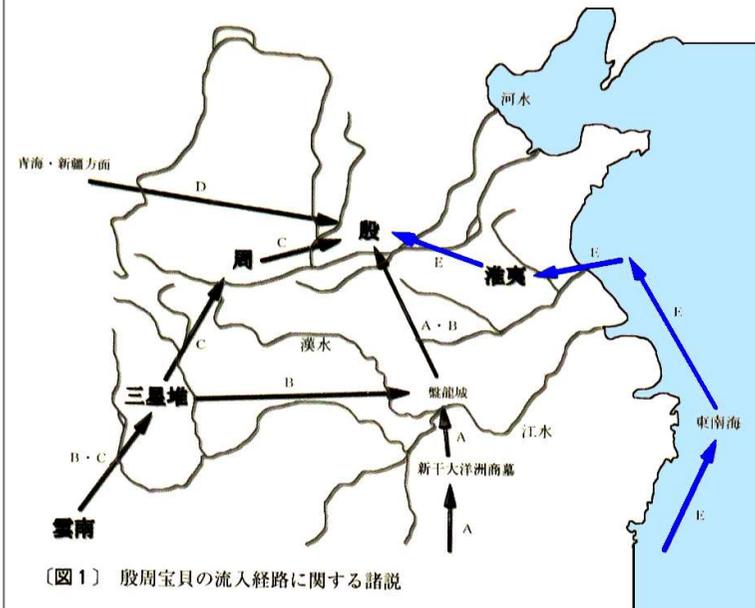


〔図7〕 春秋戦国時代の宝貝・倣貝出土地

上記グラフは木下尚子著の中国殷代宝貝の流通にと琉球の関係より

図2-4,7 は、柿沼陽平著「中国古代貨幣経済史研究」より

- キイロダカラ・宝貝は、夏王朝以前の新石器時代から出土する。
 - 夏王朝の時代から、量が増え、中原に広がる。
 - **商(殷)の時代に最高潮に達し、周、春秋の時代にも継続する。**
- 「外の美しい貝類」や「外の種類の宝貝」が、10,000年も前から貴重なものとして扱われてきた中で
 - キイロタカラガイが、唯一の威信財・通貨となるには、何か特別な要因があったのか？
 - **外のものとは異なる要素は:「均一なサイズと品質」**
 - キイロタカラガイは、成長とともに、9ミリから45ミリの範囲の大きさになる。中国の宝貝とされたものは、25mmの均一な大きさと品質が均一だった。(上田信 記)
- 夏や殷の王が、この「キイロタカラガイ」の「均一なサイズと品質」供給の提案を受けて、王がこれを採用し、臣下と与え続けることで、キイロタカラガイが、人々から唯一の威信財・通貨としての位置づけを受けたものと考えられる。



〔図1〕 殷周宝貝の流入経路に関する諸説

宝貝の供給ルート

キイロタカラガイの供給ルート
ハナビラダカラのルートはやや異なる

柿沼陽平著「中国古代貨幣経済史研究」
の図表に海と矢印の部分に着色したもの

- 柿沼陽平氏は「中国古代貨幣経済史研究」中で、
 - 東南海沿岸→淮夷(山東半島を含む)→中原が妥当とする。
 - 又、殷・周王権にとって、「宝貝の流入経路上に位置する淮夷との関係はまさに死活問題であった」とも云い、淮夷と宝貝に関する史料を3点を示す。
 - 淮夷が流通に関ったことを示唆
 - しかし、淮夷と戦い、宝貝を含む財貨を略奪したとのエピソードは、疑問を抱かせる。
 - 王族に宝貝を供給するルートを握る淮夷と、戦い・争うことは、ルートを失う、避けるべき行為。
 - 宝貝を供給したルートは、淮夷に近い処に居る別グループを示唆する。
 - 徐夷など外の東夷か？
- 木下尚子氏は、科研の報告書概要「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」の中で、
 - 山東半島に、安陽殷墟と同様の貝類組成をもつ商周代の遺跡があり、貝殻の出土状況の検討から、この地の人々が中原への貝類流通に関わっていた可能性が高い。と記す。

宝貝の生育→養殖

貝の考古学 忍澤成視著より

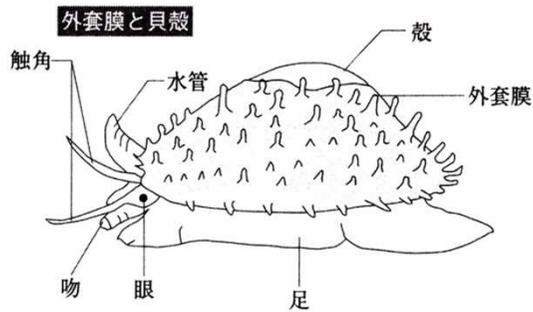


図2 タカラガイ生貝のようす (池田ほか 2007)

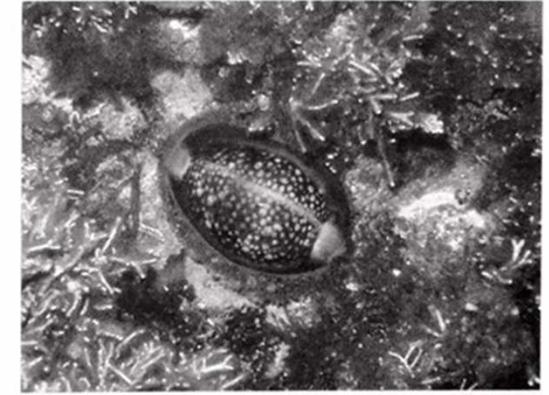
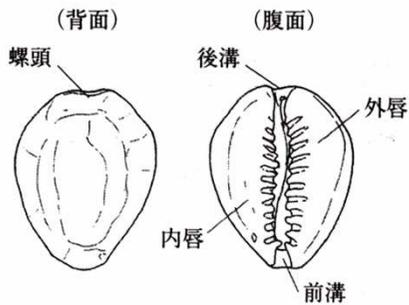


図3 タカラガイの生態写真 (伊豆大島・泉浜水深1mにて撮影)
左：外套幕に貝殻が覆われたオミナエシダカラ 右：貝殻表面が露わになったハナマルユキ



<模式標本：キイロダカラ>

図1 タカラガイ類貝殻の部分名称 (模式標本・キイロダカラ)

タカラガイは、
**幼貝段階の殻長の大きさが、
 成貝の大きさを決定してしまうという特徴がある。**
 大きさの違いは齡差ではない。

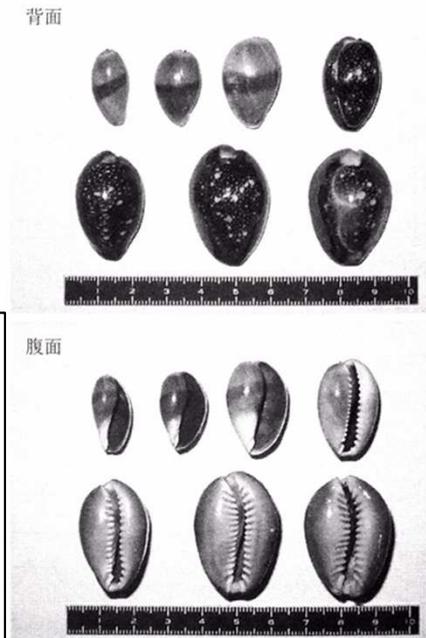


図5 タカラガイ貝殻の成長過程(ハナマルユキ)
 図の左から右に向かって徐々に成長する。
 上段：幼貝～未成貝段階 下段：成貝段階

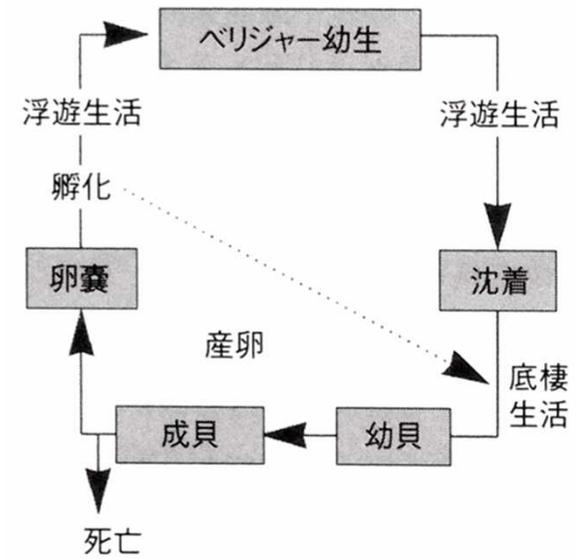


図4 タカラガイの生活史 (池田ほか 2007)

- **宝貝の特徴は、養殖で均一な宝貝を得るのに良好。**
- 産卵から、又は稚貝=種苗(しゅびょう)を採取して、環境の同じ場所で幼貝まで育成した後に、自然環境の撒き、生育すると、均一のサイズの宝貝に育つことになる。
- **中国中原の貨幣となった宝貝は、特定の海域で、人工的に、養殖され、加工されたものと推定される。**

宝貝の流通地域と産地



キイロダカラ



ハナビラダカラ

- 宝貝の品種
 - 殷・周・春秋戦国に使用された宝貝はキイロダカラ
 - 四川省・雲南省では、ハナビラダカラ
- 産地は不明とされてきた。
- 候補地は：モルディブ、タイ湾、沖縄が挙げられる。

中原地域と四川・雲南地域の差

中原地域(キイロダカラ)

- 紀元前3000年(5000年前)
 - 馬家窯文化 墳墓から陶器と共に寶貝(キイロダカラ)出土
- 紀元前2100年頃-前1600年頃
 - 二里头文化(夏王朝) 内モンゴルの大甸子遺跡で墓地から659個寶貝(キイロダカラ)出土
- 紀元前1600年～前1050年頃
 - 二里岡文化(商・殷王朝) 鄭州商城の墓より寶貝100余り 外の墓より93個。その他出土あり。
 - 婦好(商23代王部丁の妻)の墓より6880個
- 紀元前1100年～前771年
 - 周王朝
 - 寶貝の使用が続く
- 紀元前770～前221年
 - 春秋戦国
 - 寶貝の使用が続く
 - 銅貨が使用開始
- 紀元前221年～前206年
 - 秦、寶貝を廃止



四川・雲南地域(ハナビラダカラ)

中原では古代より廃止されるまでキイロダカラと云う寶貝の品種が使用された。
四川省・雲南省ではハナビラダカラと云う違う品種が使われた

三星堆の青銅器は紀元前1300年のものと測定されている

- 三星堆・祭祀二号から4600枚
 - キイロダカラが少数
 - ハナビラダカラが大多数
- 琉球グスク・三山時代
- 1372年 中山の察度明朝に朝献
- 1392年 閩人三十六姓舟を操る人を明朝が、琉球・中山に派遣
- 1404年中山の武寧朝献
 - 1416年までに北山を1429年 南山を滅ぼし琉球王朝統一
- 1434年琉球、明国へ朝献貿易寶貝550万個(+約39万個)納入(雲南省向けハナビラダカラ)
 - 1633年 宮古島を津波が襲う
- 1639年オランダ商館 琉球産寶貝入手拒絶さる
- 17世紀半ばより寶貝の価値暴落

長期間(数千年間)、通貨となった宝貝ビジネスの仕組みの推定



古代王朝の要求(古代国家の大蔵省)

- 通貨としての均一な品質の維持
- 要求数量の安定供給
- 機密保持
- 唯一のルートでの維持

宝貝納入窓口 (古代の造幣局)

- 古代王朝との窓口交渉
 - ✓ 対価の要求
 - ✓ 納入期日・数量の交渉
- 遠く離れた生産者との通信・運輸
 - ✓ 外洋航海の可能な船舶・航海技術を保持し、生産地域との往復を行い、
 - ✓ 数量・品質要求を指示、製品の運搬を行う。
- 古代王朝変換期には、新王朝との交渉を実施。

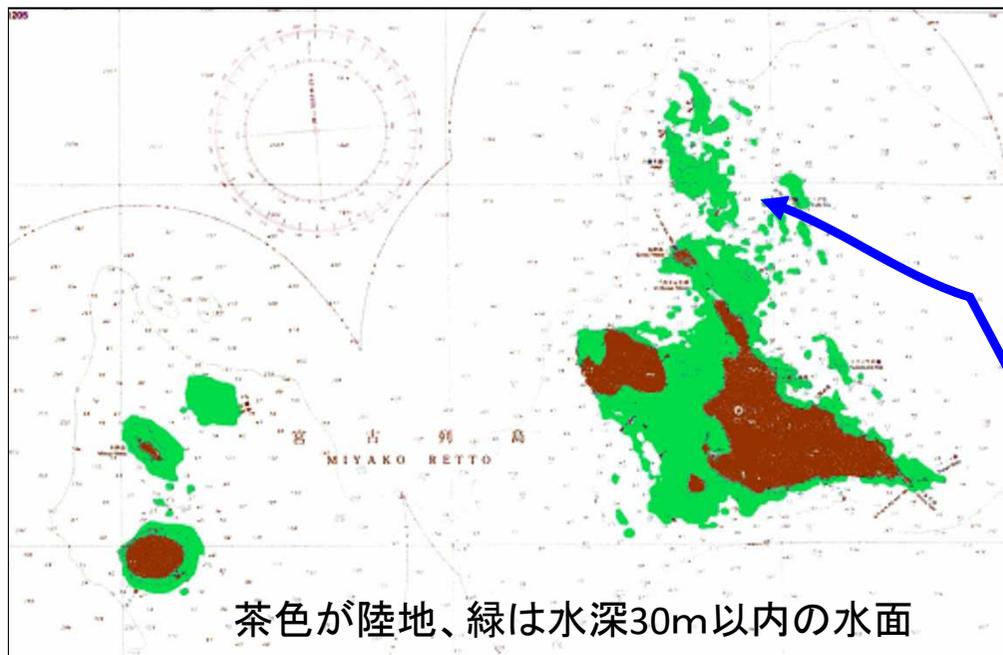
琉球側の交流地点 (那覇・琉球政府?)

- 那覇港付近にあり、大量のタカラガイなどを貯蔵し、貿易船に積み込む。
- 養殖・生産地の宮古島から那覇港に運び、そこから、中国本土へ運んだ。
- 生産地の宮古島を機密とし、隔離した。

生産地 (宮古島)

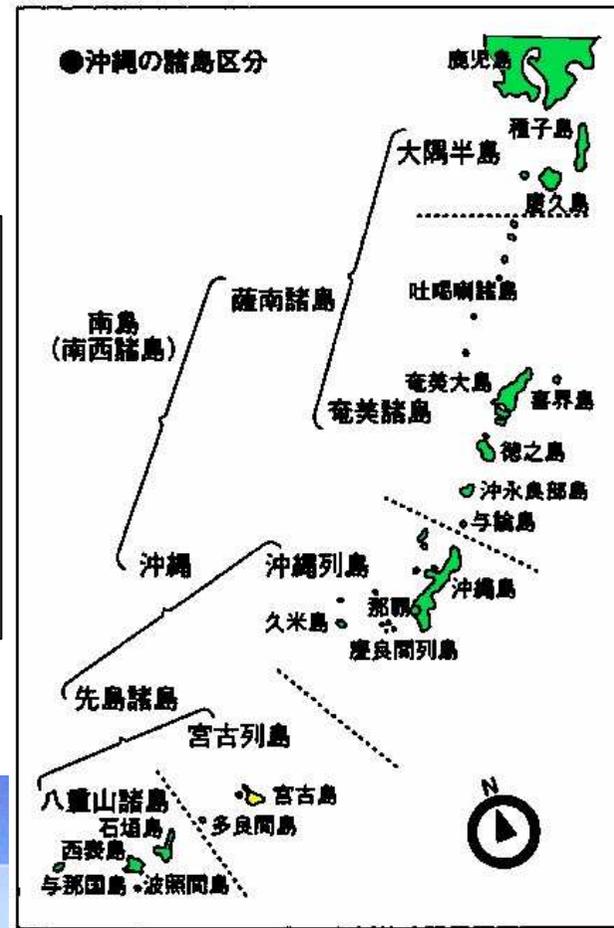
- 最適な生産地を占領し確保
- 窓口との緊密な関係を保持
- 大量で均一なサイズ・品質の宝貝を養殖する技術と加工技術を維持
- 養殖の技術も、生産自体も秘密とした

宝贝の養殖地：宮古島



宮古島付近の海図：
 緑色は水深30m以内。
 伊良部島・下地島との
 間には広い浅瀬があり、
 北方には、大潮の時に
 島のようになる岩礁が
 広がる八重干瀬(やび
 じ)がある。

八重干瀬(やびじ)



2017/07



中國で出土した宝貝

安阳妇好墓的货贝 C型・D型

キイロダカラ

婦好墓の貨貝 C:有疑問貨貝 (010828)



Cypraea (Monetaria) annulus 杯紋貨貝 ハナビラダカラ

Cy. annulus ハナビラダカラ 2000AGM5092 (010831)



橙色の環がある



ハナビラダカラガイ
Monetaria annulus

Cypraea (Erronea) caurica 厚縁擬枣貝 カバフダカラ

Cy. caurica カバフダカラ 2000AGM5092 (010831)



Cy. caurica
カバフダカラ
2000AGM5092
010831

Cypraea (Blasicrura) quadrimaculata 四斑呆足貝 ヨツメダカラ

Cy. quadrimaculata ヨツメダカラ 2000AGM5092 (010831)



平成 13~16 年度科学研究費補助金基盤研究(B) (2) 海外研究成果報告書
Report of Grant-in-Aid for Scientific Research (B) for 2001~2004
研究課題番号 Project Number 13571038

中国・琉球列島間の
タカラガイ需要・供給に関する実証的研究
—新石器時代から漢代まで—



March 2005

研究代表者 木下尚子
Head of Project KINOSHITA Naoko

熊本大学文学部
University of KUMAMOTO

木下尚子氏は、科研の報告書「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」

中國で出土した宝貝について

- 木下尚子氏は、科研の報告書「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」
- 前頁の4組の宝貝の写真中で、上の「キイロタカラガイ」と「ハナビラダカラ」は、正規に通貨として流通していた物
下の「カバフダカラ」と「ヨツメダカラ」は、そうでないもの。
- **正規流通した「キイロタカラガイ」と「ハナビラダカラ」は、「明けられた穴」の位置・形状・サイズが均一。**
- 正規流通しなかった「カバフダカラ」と「ヨツメダカラ」の穴は不均一でひび割れが入る代物。
 - **宝貝は流通時に、80個の宝貝の穴に紐を通し一つの単位(朋)としていた。**
 - 正規流通の宝貝の特定の位置に、均一の形状で開けられていた。
 - 非正規流通品は、穴の位置・形が揃わず、ひび割れが起きる不適切な穴明けしか出来ていない。
- 金属器の無い時代に、**硬い貝殻に一定の形状の穴を明ける技術を持った人々**は、南洋諸島に、普通は、住んで居なかった。
- **沖縄の宝貝**に関しては、事情が違っていた。
 - 宝貝の生産は養殖で、品種・サイズ・模様もほぼ均一。
 - 穴明け加工も均一に実施。
 - 糸魚川のヒスイの穴明け加工技術を手に入れた沖縄の交易者が、宝貝の穴明け用の道具と技術を開発したと推定する。その結果が出土品の均一の穴形状になった。
 - 貝殻の硬度は、一般的に3~4程度で、ヒスイの6.5~7の硬い硬度の穴明けの技術があれば、確実に可能であったと推定。
 - 沖縄以外の地域では、このような高度な技術を持てなかった為、非正規品の宝貝では、ひどい穴となっていた。

木下尚子氏は、科研の報告書

- 「琉球列島間のタカラガイ需要・供給に関する実証的研究-新石器時代から漢代まで」では、出土する全ての種類の宝贝を、沖縄では産出していない。
従って、沖縄(琉球)以外に産地がある可能性を残している。
 - として、沖縄産であったことを断言していないのは、誠に残念なこと。
 - 木下氏は、宝贝が養殖された貝であることの認識が無かったと推定する。
 - 自然状態の宝贝を探し求めて、通貨とした宝贝が無かったことを理由に、沖縄が宝贝の生産地と認定できなかったと推定される。
 - 正規で流通した宝贝は、大きさ、形状、色つや、模様も同一のもの。
 - 貨幣であるためには、必須の条件。
 - 沖縄にある沢山の島々の高貝生息地で宝贝を採り、それを選別したのでは、正規流通の宝贝にはならない。自然状態では、貝のサイズも違い、模様も、色も違う。
 - 宝贝は特定の地域(浜)で幼貝の時期を過ごすと、サイズが決まると云う特性を持っているため、養殖を上手に行うと、同一サイズの貝になる。(宝贝の生育→養殖の頁を参照)
 - 更に特定の貝の子孫だけ選んで養殖を複数世代重ねると、サイズだけでなく、色艶、模様も同一のものが出来る。
 - そのような選択的な養殖を行うことで、宝贝の均一サイズ、色艶、模様のもので出来た筈。
- 秦の始皇帝の宝贝廃止に伴い、キイロダカラ宝贝の養殖を廃止した場合、養殖する品種を揚子江上流向けのハナビラダカラに切り替えた場合、キイロダカラの種は消失し、その養殖場だけでなく、沖縄近辺の海からも消失したと推定される。キイロダカラガイの存在をそれ以降、現在まで探しても、取れる可能性は無い。
 - 消失させるのが、養殖業者としては、適切な処置で有ると考える。
- ハナビラダカラは、千数百年継続して、元・明の時代まで続いたが、1633年の大津波で宮古島が被害を被り、幼貝など、その品種を失った筈で、一切ハナビラダカラが取れなくなったために、宝贝ビジネスは消滅した。琉球王朝も薩摩藩も、中国側も、意に反して、中止せざる得なかった。
- 従って、もう一つの正規流通の宝贝:ハナビラダカラも、その後→現在まで探しても、沖縄近辺では取れない筈。
 - 宝贝ではない大きさ・色艶・模様のハナビラダカラは、有るかも知れないが、本物は無い。

➤ 木下氏は、「宝贝が養殖されたこと」と、実物の宝贝遺物を観察する機会が有りながら、「穴明け加工」を見落としたことは残念。

中国宝貝の流通ルート

- 中国・中原に近いルートは、山東半島付近の、淮夷ではない夷族が、取り扱ったと推定。
- 宝貝の供給した産地は何処か？
 - 熊本大学の木下尚子氏は「中国殷代宝貝の流通と琉球の関係」の中で、
 - 『中国の宝貝の消費がピークに達する殷代の時期に、大陸・台湾共通の文物～貝珠、骨製ブレスレット、蝶形製品、獣形製品～が、琉球列島に出現すること』を示し、琉球が産地である可能性を示唆している。 → [この説に共鳴する。](#)
 - 宝貝自体の産地については、同上の論文では
 - 出土する全ての種類の宝貝を、沖縄では産出していない。
 - 従って、沖縄(琉球)以外に産地がある可能性を残している。 との事
 - しかし、沖縄で全ての宝貝の品種が揃わないことは、通貨等に使われた品種が沖縄産であることは、無関係の議論で、「沖縄(琉球)以外に産地がある可能性を残している」との記述は意味が無い。
 - 特定の亜種を養殖した場合、養殖を止めた後は、同一の亜種は消滅し、産出しない可能性が大きい。養殖であることを認識していない見解と考える。
[流通させた宝貝は、美しく、同一模様、同一サイズの亜種と推定する。→偽札防止策。](#)
- 三星堆では、同じ遺跡からキイロダカラとハナビラダカラが出土する。
 - 殷からキイロダカラを入手し、同時に、当地で使われていたハナビラダカラも蓄えていたことを意味する。
 - 殷時代には、キイロダカラとは別に、雲南・四川にはハナビラダカラが供給されていたことになる。
 - ハナビラダカラも、均一のサイズと品質を保っていた。
 - 古代中国で流通した二つの宝貝は、[サイズ・品質の均一性を考えると](#)、同一グループによる、生産・供給の可能性が大。
- 後世の元・明の時代の証拠から、ハナビラダカラは、沖縄産と判明。
- 従って、二種の宝貝は、共に、沖縄から供給されたとすることの合理性が高い。

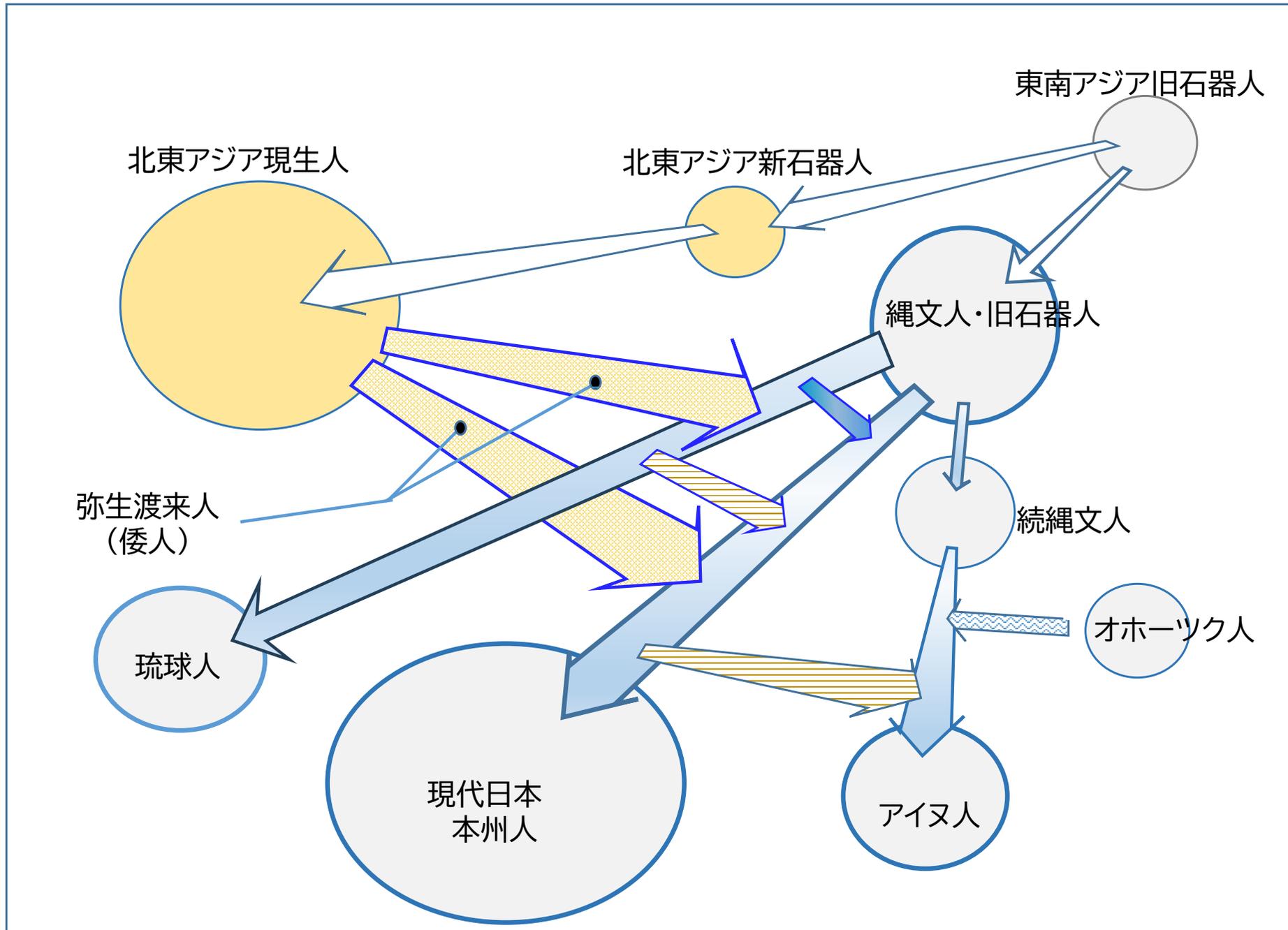
寶貝の養殖と王朝への提供は誰が行ったか

- 寶貝の養殖と加工そして中国王朝への提供は誰が行ったのか？ 推測する。
- 沖縄が養殖地であるから、当初は、沖縄人(旧石器人→縄文人)が行った筈。 沖縄・九州/本土交易の沖縄人。
- 処が、養殖地と見なされる宮古島の住人のY-DNAは、O2b1(現在のO-47Z)で、弥生渡来人の主要部分と同じ。
(弥生渡来人の主要部分は、倭人のY-DNAを持つはずで、O2b1(現在のO-47Z)と推定される。)
 - 現在の沖縄住人のY-DNAは、縄文人のD2(現在のD-M64.1)とO2b1と漢人のO3(現在のO-M122)
- 寶貝の養殖は純粹の沖縄人が開始したが、ある段階で、中国側の窓口であったと推定される倭人が、沖縄に移住し、倭人が寶貝の養殖と加工を行うことになったと考えられる。
 - 中国国内で生活していた人が、主体性をもって、別の場所に来て生活する場合は、食料・土器・住居などの生活様式と言語をもってくるはず。
 - 倭人達は、稲作・土器・高床住宅などと共に、倭人の言語(日本語の祖語)をを沖縄にもたらした筈。
 - 縄文人と混血して現地化し、寶貝の持つ圧倒的な経済力の差で、母国語を倭人の言葉とした。
 - 沖縄移住の時期推定。
 - 中国側で寶貝が大量に使われ始める時期＝夏王朝の時代(4000年前)又は、それ以前か。
 - 日本で稲作の痕跡であるプラント・オパールが検出された時期は、岡山県の遺跡で、6400年前。
 - 黒川式土器(黒色摩健土器)が出土する時期は、鬼界カルデラ爆発(7300年前)以降
 - 韓国の半島南東部・対馬に近い加徳島の6300年前の人骨のDNAは、縄文人と弥生人の混血度合いに近い。(韓国の南岸部は、九州と同列の地域と理解)
- 倭人が寶貝の養殖と加工の為に、沖縄へ移住した時期は、7000年前頃と推定される。
 - 縄文人と倭人が混血し、言語は倭人の日本祖語が使われた。
 - 漢人の混血は、明朝から漢人が派遣された時期以降。

日本人の起源論

「埴原和郎論文の図」修正案

2025/6/27 丸地案



旧石器時代に大陸から 渡ってきた人々が縄文人に

シベリア～北海道ルート

朝鮮半島～対馬ルート

台湾～沖縄ルート

国立科学博物館・篠田館長の資料などを参考に作成

- 2024年7月13日 日経新聞記事
「日本人の祖先に新説、DNA解析でたどる
縄文・弥生の足跡」

科学で迫る日本人 祖先どこから(上)

- シベリア～北海道ルートは有り得ない。
 - 旧石器遺跡の発掘状況を見れば。
 - 本州→北海道→シベリヤの遺跡群
 - シベリアに残る縄文人のDNAを見れば
- 朝鮮半島～対馬ルートは有り得ない
 - 6万年前から対馬海峡は閉じたまま。(陸地化されていない)
 - 朝鮮半島には、旧人の痕跡は残る。
 - 存在する新人の遺跡は、縄文遺跡で日本からの移住者。
- 台湾～沖縄ルートもあり得ない。
 - 台湾には海洋民族は存在しない。
 - 泳げない民族は、集団で渡海しない。
 - 別ルートから海洋民族が、沖縄へ来た。